中勘助の静岡時代の俳句について
―塩田章氏旧蔵中勘助直筆句稿「鶴」を中心に―

On Naka Kansuke's Haiku during his stay in Shizuoka

木内英実　新堀邦司
Hidemi Kiuchi　Niihori Kuniji

要旨：
二〇二一年、中勘助と師弟関係を築いた塩田章氏の次男塩田惠氏宅において、塩田章氏が戦後、ボルネオ島より復員時（一九四六年四月末）に静岡で中勘助より渡された中勘助直筆句稿が発見され、静岡市に寄贈された。中勘助の静岡滞在時期、即ち第二次世界大戦激戦期及び戦後間もない時期における中勘助の生活や心情、死生観、創作を知るうえで、大変貴重な資料と言えよう。本稿では資料寄贈者である塩田惠氏及び現資料管理者である静岡市の許可を取り、塩田章氏長女北村順氏と俳友である俳人の新堀邦司氏の協力を仰ぎ、中勘助句稿の背景を解説の上、句稿を翻刻し、中勘助句に対する評価について考察を加える。

キーワード：中勘助　塩田章　静岡　短詩型文学　俳句

一　はじめに

（一）研究の目的

要旨で概要を述べたように本稿は、塩田章氏（一九一〇～一九八一）旧蔵中勘助（一八八五～一九六五）直筆句稿の翻刻及び確認を通して、中勘助の俳句、特に静岡時代の俳句（一部分）について解題を付し、その評価を考察することを目的とする。中勘助の俳句は生前刊行の単行本『白鳥の話』（角川書店、一九五一）・『藁科』（山根書店、一九五一）・日記体随筆「樟ケ谷」・「羽鳥」・「帰京」・「随筆」等、岩波書店版『中勘助全集』〈第一五巻・第一六巻〉「書簡」に記録されたように静岡時代に作句が始まった。現在の時点で、表1及び巻末表2の通り初出28句及び既出717句（一部二重季語による重複有）、計約745句の存在が確認できた。

新堀氏及び木内の執筆分担に関しては、新堀氏が「三（二）塩田章氏旧蔵中勘助直筆句稿詞書」、「四　幻の中勘助直筆句稿『鶴』について」、「五　塩田章氏旧蔵中勘助直筆句稿「鶴」解題（新堀邦司

氏による)」を担当し、木内が「要旨」、「一　はじめに」、「二　方法」、「三　塩田章氏旧蔵中勘助直筆句稿について」、「六　塩田章氏旧蔵中勘助直筆句稿『鶴』解題（木内による）」、「七　おわりに」表1及び表2責任編集を担当する。

(二)　先行論文

現在、中勘助の俳句は角川書店版『中勘助全集』、岩波書店版『中勘助全集』「書簡」及び「樟ケ谷」「羽鳥」等日記体随筆作品を通して鑑賞することができるが、俳句に関する論考は全体として少ない。

中勘助が芭蕉の俳句「梅が香やしららおちくぼ京太郎」（『続芭蕉俳句研究』第一頁）を巡り盟友小宮豊隆に「この　しらら　で大分苦労してゐるやうだが、もう今は用のないことかもしれないが、古今著聞集和歌のところに左のやうに出てゐる」（一九二九年一一月九日付書簡）と助言を与え、小宮豊隆著『芭蕉俳諧研究』シリーズ（岩波書店、一九二九～一九三三）『芭蕉の俳句』（岩波書店、一九三三）『芭蕉の研究』（岩波書店、一九四一）を旧蔵書に有することから、連歌を俳諧の母体として位置付けた芭蕉の考えに鑑み、中勘助の俳句に関する先行論考に先んじて「沼のほとり」「しづかな流」等の日記体随筆作品に収録された中勘助の短歌に関する論考について触れるのが本来の順序と考えるが、本論では塩田章氏旧蔵中勘助句稿を主に資料として扱う関係上、次には俳句に関する論考にのみ焦点をあて時系列にて触れる。

①稲森道三郎「四　服織の文学　Ⅵ俳句」『服織の中勘助』（私家版、一九五六・一二）

出版当時、生存していた中勘助に取材して作句の背景事情を記した論考。冒頭に「白鳥の話」『東海人』〈第二巻第五号〉掲載随筆中の「黄河の堤をきつたやうに滔滔としてとめどない」「『ふと』であると同時に、多少の参考書の手引きのほかは歌や詩、文章の場合と同じく全く指導者なしの自分流儀ゆゑ見る人が見れば黄河をそのまま古く且つ濁ってゐるのかもしれない」（昭和十八年八月二十日）の文章を引用し、作句が静岡において始められたことを解説している。中勘助が初めて俳句を作品として公刊したのが『新生』であり「仏陀の夢」と題した十句を発表したことが記された。

②赤羽淑『中勘助の俳句』『文芸研究』〈第四三集〉（一九六五・三）

角川書店版『中勘助全集』収録の中勘助の静岡時代の俳句を主として取り挙げ、「かれを俳人と呼ぶのはふさわしくない。又、俳句は余技として作られたものではない」とあくまでも詩人としての中勘助の詩心の表現形態の一つとして中勘助の俳句を位置付けている。中勘助の俳句を「故人への思慕」・戦時下、老境期における「悲哀・寂寥・陰惨」・「人との交渉」・「自然との交渉」・「浪漫的幻想」・「童話的俳句」に分類し、更に芭蕉・蕪村・一茶の句と比較した。

③角川源義「中勘助さんの俳句」『俳句』〈十四巻六号〉（一九六五・六）

中勘助生前に本人編集で出版された角川書店版『中勘助全集』収録句に関連し、戦後の奈良・京都を旅行した際の句日記「古国の詩」中の句を文人俳句、抒情性俳句と記し、静岡時代の日記体随筆「樟ケ谷」中の句を疎開生活が現れた句、「落人」としての自覚を記す句、静岡の自然描写にすぐれた句、敗戦を予感させる老残の句の四種に分類して解説している。

④村山古郷「中勘助の俳句」『文人の俳句』（桜楓社、一九六五）

「転地療養かたがたの疎開地で、小説も書けず詩作に耽ることもできない時にでき出した俳句である」と志して作句したものではなくその時の環境と境涯によって自然発生的にできたものとして解説した。その俳句の傾向と特長として「自然の風景、身近な事象を風物詩的に静かに穏やかに詠んだ平明な句」、「非現実的な空想の俳句」と大別し、前者を中勘助俳句の本領と位置付けた。三好達治の中勘助詩評「中さんの詩は静かで穏やか」とそれが重なることに言及した。

⑤石塚友二編『文人俳句歳時記』（生活文化社、一九七〇・四）

中勘助句、三八句が取り上げられている。同書中、村山古郷「文人俳句の展望」では中勘助の俳句を「至純流麗にして散文詩のような文章に俳句的風趣を点綴するといった俳句である」と評した。

⑥清見北斗「中勘助」〈鑑賞・文人の俳句・10〉『ゆく春』〈七〇・四〉（一九九七・四）

中勘助の俳句六句を挙げ「惜辞・結構などの均整がとれ、内的リズムやイメージの鮮明さ申し分なく、むしろ出木すぎの感なしとせず、一定の粛然たるモノクロームで、消音の世界が展開する清高な世界を示している。季語も十分に血肉化し、季重なり等という評も不要の力を備えています。内田百閒と別な面から専門俳人的力量を感じざるをえません」と称賛する。

⑦新堀邦司「中勘助と俳句（1）」『日矢』（二〇一七・一）

中勘助が俳句を始めた理由について「戦時下において執筆活動が思うとおりに運ばなかったこと」「静岡の田園生活が勘助本来の詩心を一層豊かに満たしたこと」「俳句好きの友人による影響」と挙げ、塩田章からの影響について触れた。「和歌の影響の色濃い俳句もいいが、豊かな田園と友人との交流を詠んだ挨拶句も味わい深い」と評した。

⑧新堀邦司「中勘助と俳句（2）」『日矢』（二〇一七・二）

中勘助の作句と俳句鑑賞に影響を与えた塩田章以外の人物として稲森道三郎を挙げ稲森との交流を解説した。また中勘助の生涯において詠んだ約七百の俳句を㈠詩歌の伝統を踏まえた万葉の世界の句、㈡静岡の田園を詠んだ句、㈢愛する者の死を悼んだ句、㈣親しい人へ贈った挨拶句」の四ジャンルに分類した。

⑨新堀邦司「中勘助と俳句（3）」『日矢』（二〇一七・三）

⑦で示した四ジャンルの内、㈢㈣に該当する代表句を、推敲の過程、その句にまつわる人間交流（吉見祐作・塩田章・稲森道三郎）を解説し、「俳句が身近にあったことが勘助の晩年にどれほど豊かな彩りを添えたか」という人間・中勘助の生涯における俳句の位置づけに言及した。

二　方法

新資料である塩田章氏旧蔵中勘助直筆句稿の翻刻を行った上で、新堀氏及び木内が背景事情等解説の後に解題を付す。

三　塩田章氏旧蔵中勘助直筆句稿について

（一）　塩田章氏旧蔵中勘助直筆句稿封筒・詞書・あとがき（塩田章氏直筆資料・静岡市所蔵資料）封筒縦23㎝×横12㎝白地に黒墨毛筆・詞書及びあとがき縦9㎝×横21㎝白地に黒墨毛筆

（二）塩田章氏旧蔵中勘助直筆句稿詞書・あとがき（塩田章氏直筆資料・静岡市所蔵資料）翻刻、〔　〕がない①～④の翻刻は新堀氏及び木内による翻刻において共通した部分である。

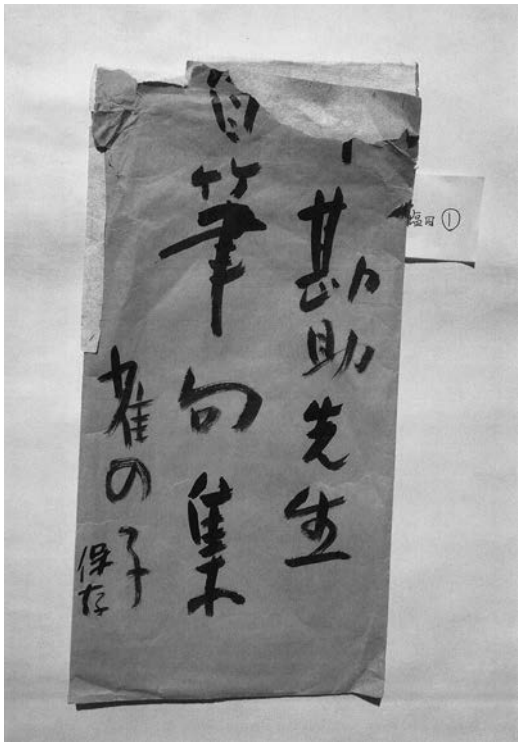
①写真一葉目
中勘助先生
自筆句集
雀の子
　保存

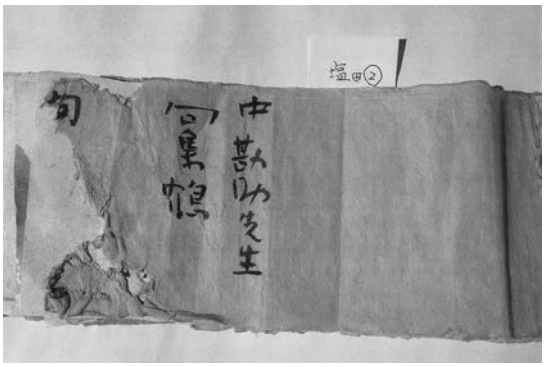
②写真二葉目
中勘助先生句集　鶴
句

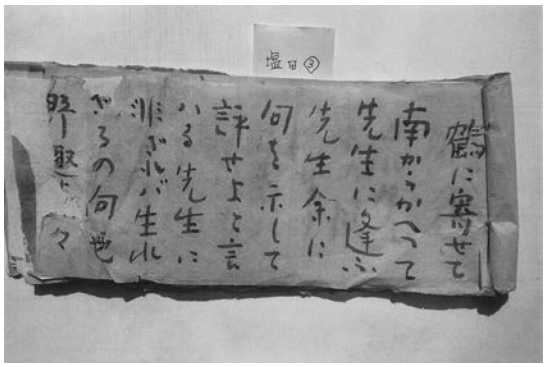
③写真三葉目
鶴に寄せて
南からかへつて
先生に逢ふ
先生余に
句を示して
評せよと言
ハる　先生に
【新堀氏翻刻】非ざれば生れ　【木内翻刻】非ざれバ生れざるの句也
【新堀氏翻刻】野趣上々　【木内翻刻】野趣点々

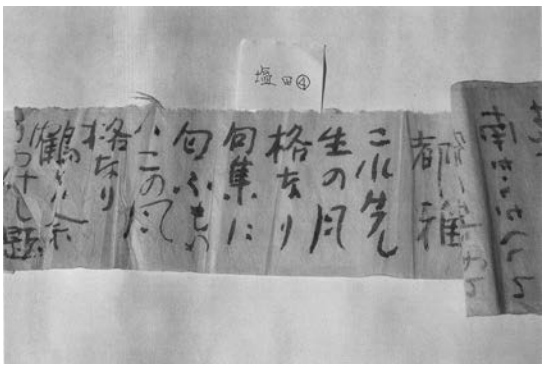
④写真四葉目
都雅
【新堀氏翻刻】これ多し　【木内翻刻】これ先
生の風
格なり
句集に
匂ふもの
ハこの風
格なり
【新堀氏翻刻】鶴とハ余　【木内翻刻】鶴トハ余がつけし題
【新堀氏翻刻】なり

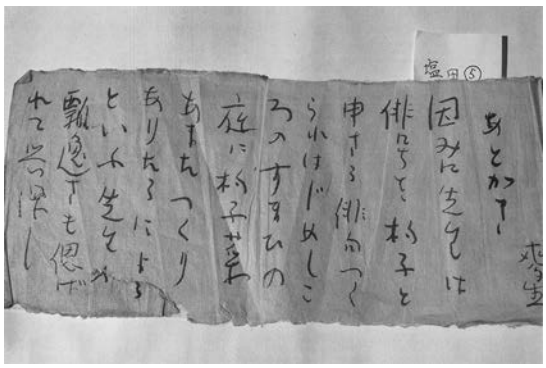
⑤写真五葉目
【全体木内翻刻】
　麥生
　あとがき
因みに先生は
俳号を杓子と
申さる俳句つく
られはじめしこ
ろのすまひの
庭に杓子菜
あまたつくり
ありたるによる
といふ先生の
飄逸さも偲ば
れて興深し


塩田①
勤助先生
筆句集
雀の子
保存

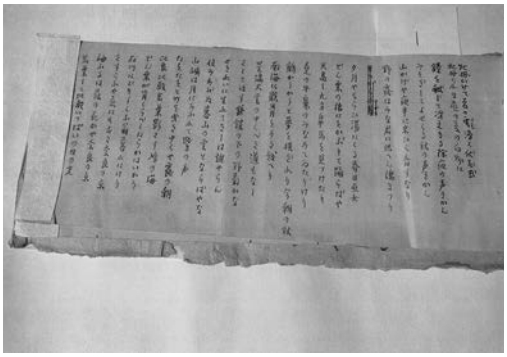

塩田②
中勤助先生
句集
鶴
句

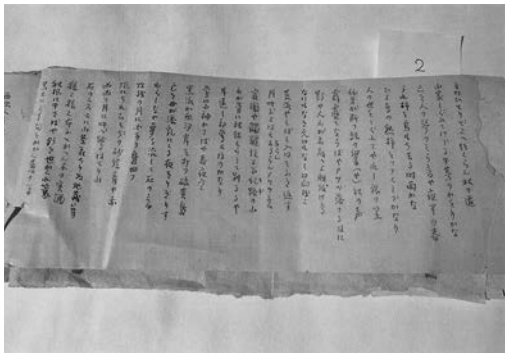

塩田③
鶴に寄せて
南からかへって
先生に逢ふ
先生余に
句を示して
評せよと言
ふる先生に
非ぶば生れ
ざるの句也
野聚々

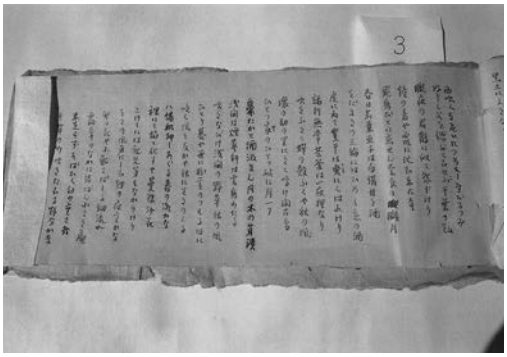

塩田④
南からかへって
新稚
春稚
これ先
生の句
格なり
句集に
句ふもの
この句に
格なり
鶴の余
つけし題

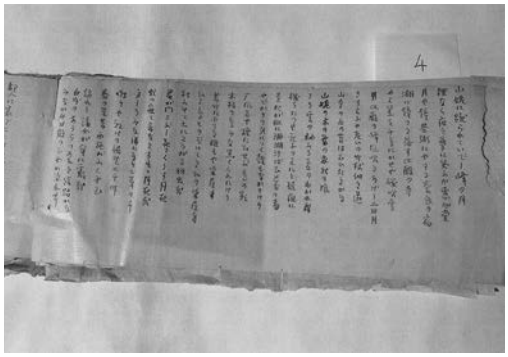

塩田⑤
麥生
あとかた
因みに先生は
俳号を杉子と
申さる俳句つく
らんはじめしこ
ろのすがたの
庭に杉子菜
あまたつくり
ありたるによる
といふ先生の
謙遜なるも思ひ
れて尚ほし

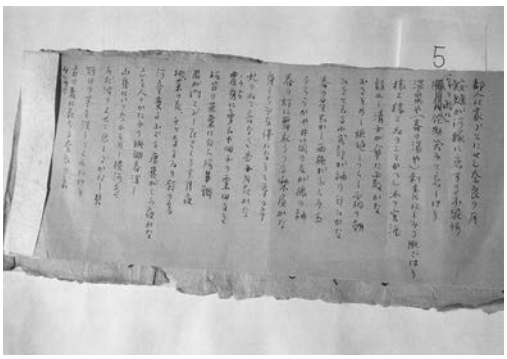
（三）　塩田章氏旧蔵中勘助直筆句稿（中勘助直筆資料・静岡市所蔵資料）縦９㎝×横21㎝の罫線入り用紙両面に黒ペン書き

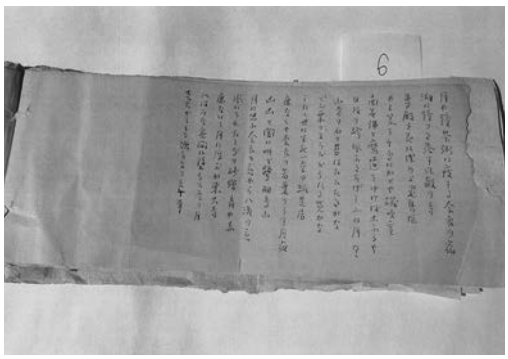


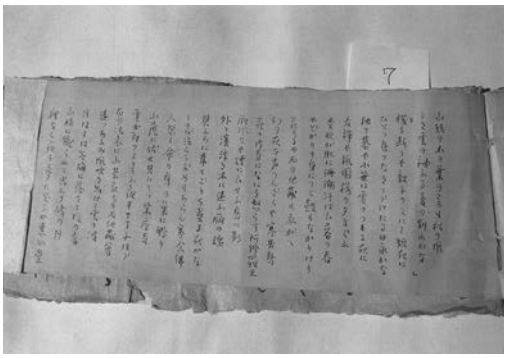












（四）塩田章氏旧蔵中勘助直筆句稿（中勘助直筆一六三句）翻刻

後ほど、岩波書店版『中勘助全集』既出句との照合を行う関係上、一覧表（表1）を作成した。

表1凡例　「表2との照合」欄及び「『中勘助全集』照合」欄
「表2との照合」欄　夏13・106　表2における夏季語No.13及びNo.106と同一
「『中勘助全集』照合」欄　⑨190・291　岩波書店版『中勘助全集』第九巻p.190及びp.291に同一句がある。
No.欄網掛け二六句は岩波書店版『中勘助全集』〈第一四巻〉未収録（木内初見）句。

	表2との照合		翻刻句	『中勘助全集』照合	類似句	『中勘助全集』照合
1	夏	13・106	牡丹いけて夏の雲湧（クモ）く伏屋哉（ふやや）		牡丹いけて夏の雲わく伏屋**かな**	⑩52⑭藻科
2	夏	107	牡丹ちれま昼の夢の白妙に		**ぼたん散れ**真昼の夢のしろたへに	⑩52⑭藻科
3	冬	13・87	鐘を献じて冴えきる除夜の声きかん	⑨190・291⑭藻科		
4	秋	38	みそぎしてよせくる秋の声きかん		みそぎして**寄**せくる秋の声きかん	⑨178・290⑭藻科
5	季語なし		山かげや夜半に米ひく音すなり			
6	秋	108	野の露はみな君に供へん魂まつり	⑨177・290⑭藻科		
7	秋	60	夕月やもらひ湯にくる春日巫女		**ゆふ**月やもらひ湯にくる春日巫女	⑨186・290⑫24⑭藻科
8	秋	188	どん栗の猪口をかぶりて踊らばや	⑨189・291		
9	秋	39	天高し九方皐馬を見つけたり		天**高**し九方皐馬を見つけたり	⑨189・290⑭藻科
10	季語なし	5	堯の牛鼻のみなめてゐたりけり		**堯**の牛鼻のみなめてゐたりけり	⑨189・291⑭藻科
11	秋	16	鶴かうかうと夢を横ぎれり今朝の秋		鶴かうかうと夢を横ぎれり**けさ**の秋	⑨27・290⑩28⑭藻科
12	季語なし		南海に骸骨をめき戰へり			
13	秋	117	星滿天雲のゆくべき道もなし		星**滿**天雁わたるべき道もなし	⑨190
14	秋	227	さしとほす鎧の下の野菊かな		**刺**しとほす鎧の下の野菊かな	⑨189
15	秋	135	せきれいに生れてきしは誰やらん	⑨46		
16	季語なし	2	住みわびぬ暮山の雲とならばやな	⑨106・291		
17	秋	58	山峡はつきにあふれて鷺の声		山峡は**月**にあふれて鷺の声	⑨36・291
18	秋	88	たをたをと竹を曳きゆくや露の朝		たをたをと竹を**ひ**きゆくや露の朝	⑨45・291⑭藻科
19	夏	121	比良比叡若葉影さす鳰の海		ひら比叡**わか**葉影さす鳰の海	⑨185⑭藻科
20	秋	186	どん栗が背くらべしたらかはいかろ	⑨189		
21	夏	79	石川にごりすくふ翁暮れにけり		石川に**鉅**すくふ翁暮れにけり	⑨290

22	季語なし	1	さすらふや恋にも古き奈良の京	⑨186⑫25⑭藁科
23	春	147	袖ふるは藤の花かや奈良の京	⑨186・290⑭藁科
24	夏	125	若葉して比叡いつぱいの日の光	⑨185・289⑭藁科
25	秋	7	またひとりどこへ行くらん秋の道	
26	秋・冬	秋220・冬27	山家しぐれてけづる牛蒡のかをりかな	
27	春	1	亡き人の琴のそら音や夜半の春	⑨223⑭藁科
28	秋	159	うれ柿を烏もち去る時雨かな	⑨227⑭藁科
29	秋	127・162	ひよ鳥の熟柿をつつくしづかなり	⑨228
30	冬	30	人の世をしぐれてやれし旅の笠	⑨229⑭藁科
31	秋	37	伯牙が断つ絃の響（や）秋の声	
32	季語なし	15	霹靂とならばやアツツ落つる日に	
33	夏	53	影や人わが名教へよ羽抜け鳥	
34	新年	1	なにもなき元日もなし日向ぼこ	
35	季語なし	17	荒潮やしばし入日をふき返す	
36	秋	48	月叫ぶよはもあるらん（あらん）アツツ島	
37	秋	69	宵闇や髑髏経よむ紀路（き・ぢ）の山	⑨264⑭藁科
38	季語なし	19	わが骨に独鈷もらうて別るるや	⑨273⑭藁科
39	春		耳遠し初鶯もほのかなり	
40	春	5・94	鶯に小袖かさばや春夜寒	⑨341⑪176・⑭藁科
41	季語なし	20	黒潮か血汐岸を打つ硫黄島	
42	秋	148	亡き母が添乳にくる夜きりぎりす	
43	季語なし	21	わらしなや夢を流して石の音	⑨327⑫237
44	季語なし		敗残の月に国あり島四つ	
45	季語なし	28	風にちれむそぢの砂絵青や赤	⑨402
46	季語なし	29	凶凶と月に叫べ鷺はとり山	
47	冬	125	石のころもに山茶花ちりぬ地蔵尊	
48	秋	178	猿こ猿こ布子とかへん木の実酒	⑨403⑭藁科
49	冬	19	秋風に干さばやうき世かくれ簑	
50	冬	138	黒土によき句をかかん葱の筆	
51	春	46・159	西吹くな老いにつめたし野びるつみ	

22			
23			
24			
25	またひとりどこへ**ゆ**くらん秋の道		⑮313昭二〇・二・一三小宮豊隆宛
26	山居しぐれてけづる牛蒡のかをり**哉**		⑨223⑭藁科
27			
28			
29			
30			
31	伯牙が**たつ**絃のひびき秋の声		⑨234
32	霹靂とならばアツツ落つる夜に		⑨234
33	影や人わが名**をし**へよ**羽ぬけ**鳥		⑨234
34	なにもなき元日**もよし**日向ぼこ		⑨249
35	荒潮やしばし入日をふき**かへす**		⑨258⑭藁科
36	月叫ぶ**夜はもあらん**アツツ島		⑨259
37			
38			
39			
40			
41	黒潮か血**しほ**岸を打つ硫黄島		⑨320
42	亡き母が添乳する夜**や**きりぎりす		⑨320
43			
44			
45			
46	凶凶と**闇**に叫べ鷺はとり山		⑨402
47	石のころもに山茶花ちりぬ地**蔵**尊		⑨402
48			
49	**木枯**に干さばやうき世かくれ蓑		⑨420
50	黒土によき句**かかばや**葱の筆		⑩40
51	**こち**吹くな老い**は**冷たし野**蒜**つみ		⑩52

52	冬	75	好きし父を偲びてむせぶ干葉の飯	⑮360昭二一・四・一 六稲森道三郎宛
53	春	43	朧夜の君鸛に似て怨じけり	
54	春	35	鐘の音や霞に沈む東大寺	
55	春	42	飛鳥びとに恋せん奈良の朧月	
56	夏	115	春日若葉巫子は白絹甘き酒	
57	春	163	をだまきの三輪にはひめし恋の酒	⑨186・290⑭藁科
58	夏	97	虎にねて豊干は蚤にくはれけり	⑨189　290⑭藁科
59	冬	97	諸行無常茶釜は一夜狸なり	⑨189・291
60	秋	78	吹きふきて蟬の殻ふくや秋の風	⑨189・290⑭藁科
61	冬	112	壞の劫の里にきて鳴け閑古鳥	
62	秋	56	ひとつ家のひとつ砧に月一つ	
63	春	164	鼻たかと酒汲まん月の木の芽漬	
64	秋	116	浅間は煙蓼科は雲鳥わたる	
65	秋		吹きなびけ浅間の野草秋の風	
66	冬	50	ひとり碁や笹に粉雪のつもる日に	
67	秋	79	吹く風を友かや秋に生きのこる	⑨206
68	春	51	八幡船押しあぐる春の潮かな	
69	秋	228	裸にて焔と化すや曼珠沙花	
70	季語なし	11	こけしには親兄弟もなかりけり	⑨206⑭藁科
71	秋	27	をさの風身にしむ越の夜寒かな	⑧19⑨209⑭藁科
72	夏	131	卯の花や小鮎さばしる細流れ	
73	秋	232	露草のなかに結ばん小さき庵	
74	季語なし	12	米足らずそばひく臼の重さ哉	
75	秋	84	千竿の竹吹きたむる野分かな	
76	秋	57	山姥に蹴られていでし峰の月	
77	冬	99	狸なく夜を夢に笑ふか恵心堂	
78	秋	53	月や鐘茶粥にやする奈良の宿	
79	季語なし	30	湖に鐘つき落す比叡の寺	
80	冬	64	やよ笠を千鳥にかせや磯吹雪	⑨402⑭藁科
			朧夜の君鸛に**にて**怨じけり	
			鐘の音や霞に**しづむ**東大寺	
			飛鳥**人と**恋をせん奈良の朧月	
			春日若葉**みこ**は白絹**あまき**酒	
			壞の劫の里にきて鳴け**寒苦鳥**	
			ひとつ**や**の**一つ**砧に月**ひとつ**	
			鼻**高**と酒**くまん**月の木の芽漬	
			浅間は**けむり**蓼科は雲鳥わたる	
			独り碁や笹に粉雪のつもる日に	
			八幡**船**押しあぐる春の潮かな	
			裸にて焔と化すや曼珠沙**華**	
			うの花や小鮎さばしる**ほそ**流	
			つゆ草のなかに**むすばん小き**庵	
			米足らず**蕎麦**ひく臼の重さ**かな**	
			万頃の竹**ふき**たむる野分かな	
			山姥に蹴られて**でたり**峰の月	
			狸なく夜を夢に笑ふか**恵**心堂	
			月や鐘茶粥にやする奈良の**坊**	
			湖に鐘つき**おとす**比叡の寺	
				⑨188
				⑨186・290⑭藁科
				⑨186・290⑭藁科
				⑨186・290⑭藁科
				⑨176・291⑭藁科
				⑨190・291⑭藁科
				⑨199⑭藁科
				⑨204
				⑨204⑫248⑭藁科
				⑨206
				⑨206⑭藁科
				⑨209
				⑨210
				⑨212⑭藁科
				⑨212
				⑨402
				⑨402⑫73⑭藁科
				⑨402⑫24⑭藁科
				⑨402⑭藁科

81	秋	55	比叡の峰風吹きあげし二日月		⑮337昭二〇・一二・一三小宮豊隆宛
82	季語なし		さすらふや老いの竹杖細き道		
83	秋	134	山寺の石の苔はむひたきかな		⑨402
84	秋	82	山姥の木の葉の衣秋の風		⑨401
85	季語なし	32	うき雲の袖ふる夢のわかれ哉		⑨402⑭藁科
86	夏	6	機をたつや親子のえにし短夜に		
87	春	30	貴妃が肌に珊瑚汗ばむ暮の春		
88	春	109	やどかりの身につく殻もなかりけり		
89	春	92	雁風呂や煙にむせぶ鳥の影		
90	季語なし	52	木枯の鳥みな黒くくれにけり		⑩383
91	夏	139	若竹に小さき姫もや柴屋寺		⑨342⑩28
92	秋	126	ひよ鳥とのぞいてきたり柴屋寺		
93	秋	28	秋ふけて土にころがる羽虫哉		⑨400
94	春	149	君が門こぶし花さくうす月夜		
95	夏	110	虻の寐て音なきすも、月夜哉		⑨400⑭藁科⑮350昭二一・三・五
96	秋	106	身うちみな佛になりて草の市		⑨403⑭藁科
97	春	101	囀りや朝けの裾野二千町	⑨403⑭藁科	
98	春	7	春の星昔西施がふくみ玉		⑨403⑭藁科
99	冬	34	訪れし清女が傘に霰哉		⑨401
100	季語なし	25	白妙のあうらつめたき絵踏かな		⑨339⑭藁科
101	春	161	みなかみは鶴の乙女か流れ芹	⑩39	
102	季語なし		都人に家づとにせん奈良の月		
103	冬	117	鮟鱇が河豚に戀する小泥海		⑨401⑭藁科
104	冬	8・123	年の瀬に侘助笑みて戀しけり		⑨403⑭藁科
105	春		温泉や（春の湯や）刺青にしみる肌ざはり		
106	秋	178	猿こ猿こぬのことかへん木の実酒		⑨403⑭藁科
107	冬	34	訪れし清女が傘に霰かな		⑨401
108	冬		朧月夜おきそめし炬燵うつくし霜の朝		
109	季語なし		ひきとむる小式部が袖の匂ひかな		

81	秋	55	**日枝の峯**風ふきあげし二日月		⑮337昭二〇・一二・一三小宮豊隆宛
82	季語なし				
83	秋	134	山寺の石の苔はむひたき**哉**		⑨402
84	秋	82	山姥の木の葉の**ころも**秋の風		⑨401
85	季語なし	32	うき雲の袖ふる夢の**別れかな**		⑨402⑭藁科
86	夏	6			
87	春	30			
88	春	109			
89	春	92			
90	季語なし	52	**やま里**の鳥みな黒くくれにけり		⑩383
91	夏	139	若竹に**ちさき**姫もや柴屋寺		⑨342⑩28
92	秋	126			
93	秋	28	秋ふけて土にころがる**羽虫かな**		⑨400
94	春	149			
95	夏	110	虻の**ね**て音なき**杏**月夜かな		⑨400⑭藁科⑮350昭二一・三・五
96	秋	106	身うちみな**仏**になりて草の市		⑨403⑭藁科
97	春	101			
98	春	7	春の星**むかし**西施がふくみ玉		⑨403⑭藁科
99	冬	34	**おとづれし**清女が傘**の霰かな**		⑨401
100	季語なし	25	**ためさるる**あうら冷たき踏絵かな		⑨339⑭藁科
101	春	161			
102	季語なし				
103	冬	117	鮟鱇が**ふぐ**に恋する小泥海		⑨401⑭藁科
104	冬	8・123	年の瀬に侘助ゑみて**恋**しけり		⑨403⑭藁科
105	春				
106	秋	178	猿こ猿こ**布子**とかへん木の実酒		⑨403⑭藁科
107	冬	34	**おとづれし**清女が傘**の霰かな**		⑨401
108	冬				
109	季語なし				

110	春	7	春の星むかし西施がふくみ玉	⑨403⑭藁科	
111	季語なし		うららかや井筒の友が振の袖		
112	春		春の灯に舞衣うつる樂屋かな		
113	秋	106	身うちみな佛になりて草の市		身うちみな**仏**になりて草の市
114	夏	110	虻のねて音なき杏月夜かな	⑨400⑭藁科⑮350 昭二一・三・五	
115	春	50	農鳥（ノウトリ）に勇むや田子の粟田まき	⑨400⑭藁科	
116	春		板台の笹葉に匂ふ櫻鯛		
117	春	146	君が門こぶし花さくうす月夜	⑨403	
118	春	116	桃、菜の花、千ヶ寺まゐり鈴の音		**桃菜の花**千ヶ寺まゐり鈴の音
119	季語なし	103	河童煮るふごを唐箕がくふ夜かな		河童煮るふごを唐箕がくふ夜**哉**
120	春	6	亡き人のかたみの珊瑚春浅し		亡き人のかたみの珊瑚春**あさし**
121	季語なし		山鳥にいつなれそめし横河寺		
122	季語なし		あだ波のよせて悲しきかたし貝		
123	冬	11	短日の芋を洗うてくれにけり		短日の芋を洗ひて**暮**れにけり
124	春	128	古の（千年の）夢に花ちる奈良の京		**千年の**夢に花ちる奈良の京
125	秋	53	月や鐘茶粥に痩する奈良の宿		月や鐘茶粥に**やする**奈良の坊
126	季語なし	30	湖に鐘つき落す比叡の寺		湖に鐘つき**おとす**比叡の寺
127	春	117	夢殿を花に埋めよ飛鳥風		夢殿を花に埋めよ**あすか**風
128	冬	64	やよ笠を千鳥にかせよ磯吹雪		やよ笠を千鳥にかせ**や**磯吹雪
129	春	49	南無佛と魔道をゆけば土ふるや		南無**仏**と魔道をゆけば**霾るや**
130	秋	55	日枝の峰風ふきあげし二日月？		**日枝**の**峯**風ふきあげし二日月
131	秋	134	山寺の石の苔はむひたきかな		山寺の石の苔はむひたき**哉**
132	秋	189	どん栗のまろびおちたる筧かな	⑨401⑭藁科	
133	季語なし		うたて世に生死一重の紙芝居		
134	夏	118	鹿なくや奈良の若葉のうす月夜	⑨402⑭藁科	
135	季語なし	29	凶凶と闇に叫べ鷺羽鳥山		凶凶と**闇**に叫べ鷺はとり山
136	季語なし		月に思ふ奈良の戀やら八瀬の戀		
137	季語なし	28	風にちれむそぢの砂繪青や赤		風にちれむそぢの砂**絵**青や赤
138	秋	114	鹿ないて月に浮ぶか東大寺	昭二十・十一・十五	

110			
111			
112			
113		⑨403⑭藁科	
114			
115			
116			
117			
118		⑨400	
119			
120		⑨399⑭藁科	
121			
122			
123		⑨400	
124		⑩3383	
125		⑨402⑫24⑭藁科	
126		⑨402⑭藁科	
127		⑨400⑭藁科	
128		⑨402⑭藁科	
129		⑨400⑭藁科	
130		昭二〇・一二・一三	
131		⑨402	
132			
133			
134			
135		⑨402	
136			
137		⑨402	
138			

139	冬		人はみな無間に堕ちて冬の月																					
140	夏		炎天やミイラ魂をまつ五千年																					
141	秋	82	山姥の木の葉のころも秋の風	⑨401																				
142	季語なし	32	うき雲の袖ふる夢の別れかな	⑨402⑭藁科																				
143	夏	6	機を断つや親子のえにし短夜に																					
144	春	32	ひとつ鳥のなきつづけたる日永かな																					
145	冬	50	独り碁や小笹に雪のつもる夜に																					
146	春	134	友禅や祇園櫻の夕まぐれ																					
147	春	30	貴妃が肌に珊瑚汗ばむ暮の春	⑨403⑭藁科																				
148	春	109	やどかりの身につく殻もなかりけり	⑨206																				
149	春		花ちるや石の地蔵も衣がへ																					
150	冬	111	幻の夜を声つんざくや寒苦鳥	⑮333昭二〇・一一・一五松原君子宛																				
151	春		花の御寺になにを怒らす阿修羅王																					
152	春	92	雁風呂や煙にむせぶ鳥の影	⑨403⑭藁科																				
153	春		外ヶ濱浮き木に迷ふ雁の魂																					
154	秋		貝ふろに茸とごりを煮る夜かな																					
155	冬		しのび泣くうぶめもあらん寒念佛																					
156	春	100	人悲し命々鳥の巣に孵り																					
157	季語なし	16	山蔭に伏せ貝ひとつ柴屋寺																					
158	冬		雪女郎のよりそふ夜半や丁子はづ																					
159	冬	125	石の法衣に山茶花ちりぬ地藏尊																					
160	季語なし		遠つあふみ風吹きぬけて雲の波																					
161	秋	50	月はすは無間に落ちて風の音																					
162	秋	57	山姥に蹴られて出たり峰の月																					
163	冬	99	狸なく夜を夢に笑ふか恵心堂																					

四　幻の中勘助直筆句稿「鶴」について

これまで、中勘助には俳句集が編まれたことはなかったとされてきた。ところが、最近になって本人自筆の俳句集が存在することが判明した。俳句集はたった一冊で、勘助がそれまでに詠んだ俳句の中から自選したものである。俳句集といっても、きちんとした本の体裁を整えているわけではないので、アンソロジー（詩華集）、句稿と言った方がいいかもしれない。

この俳句集を保管していたのは塩田章氏の遺族であった。

塩田氏は「中勘助文学」の熱狂的なファンの一人であった。明治四十三年（一九一〇）の生まれ。勘助は明治十八年（一八八五）の生まれだから、二人の年の差は二十五もあった。東北の福島県出身の塩田氏は実直な顔立ちをしており、少しも飾るところのない、天衣無縫の人であった。無教会的なクリスチャンで、特定の教派に属さない独立自給の伝道者であった。塩田氏はこよなく詩歌を愛し、詩をつくり俳句を嗜み、仲間たちと小さな句会を立ち上げて活躍していた。勘助は自分の懐に飛び込んできた塩田氏を快く受け容れている。その証拠が勘助がとった行動だ。昭和十六年（一九四一）九月に勘助が初めて塩田家を訪問したことである。それまで、ファンが勘助の住居を訪ねてきたことは度々あったが、本人がファンの家を訪問したことはなかった。塩田氏の家は、多摩川の中流の狛江にあった。狛江の農家の納屋を借りて、ここを仮りの住まいとしていた。竹藪の隣にあったので塩田氏はこの家を「雀のお宿」と称していた。ここに塩田氏は妻子と五人で暮らしていた。貧しい暮らしぶりであったが、ここにはそれまで勘助が経験したことのなかった家族の温かな団欒があったのである。勘助は塩田家の団欒の一員に加えてもらい、いつしか、二人は俳句の話をするようになった。俳句に寄せる塩田氏の熱い想いに耳を傾け、彼が詠んだ俳句に接しているうちに次第に興味を抱くようになっていた。

後に、二人は互いに俳句作品を披露し合うようになる。手紙に添えられた二人の俳句を読むと、相問歌のように思えてくる。

囀りや雀の宿の宝子ら

春の季語「囀り」を用いて、勘助が塩田氏に賜った挨拶句である。塩田氏は子宝に恵まれ、貧しいながらも家族は仲睦まじく、子どもたちの声は小鳥の囀のようにいつも賑やかであった。勘助は塩田家（「雀のお宿」）を訪ね、子どもたちとも楽しそうに語らい、童心にかえって遊んだ。右の句からは勘助が塩田氏の子どもたちとの温かな交流の様子が読者に伝わってくる。

ところで中勘助直筆句稿の題名は「鶴」。「鶴」には百六十三句あまりの俳句が収められている。勘助がペンを手にして白紙の紙片に一句々々を几帳面に書き記したものである。この句集を手にした時、新堀は抑えきれない感動を覚えた。

ことの経緯は次のようなものであった。

新堀の妹が埼玉県入間郡越生町に住んでいて、塩田章氏の遺族と親しい間柄にある。塩田章氏とその妻玉は七人の子宝に恵まれた。上から、順（すなお）、睦（むつみ）、惠（めぐみ）、希（のぞみ）、泉（いずみ）、はるか、永（ひさし）である。まことに賑やかな「雀のお宿」であった。「雀のお宿」が狛江にあった時代から勘助は塩

田家の子どもたちを実の孫のように温かな眼差しで見守ってきた。戦後、塩田家族は越生町に移り住む。昭和二十二年（一九四七）秋に第四子が誕生すると塩田氏は「希」と命名した。同年十月に勘助は次のような手紙を送っている。

「お芽出たう、のぞみさんもいいですね。すなおさん、むつみさん、めぐみさん、のぞみさんさて次は何さんになさりますか。」

新堀の妹は塩田章氏長男の故睦氏の家族と同じキリスト教会で親しくさせてもらっている。新堀は妹を通して塩田家の様子を伝え聞いていた。そして、二〇二〇年八月末に新堀は妹と一緒に塩田章氏長女の北村順氏にお会いする機会を与えられた。順氏は越生町の近くに住んでおられる。両親の信仰を継承してご自身もクリスチャンであり、夫は聖公会の牧師をしていた。父親の影響を受けて俳句を趣味としており、俳人の大野林火（おおの　りんか）から指導を受けてきたという。その日は、勘助の想い出をたくさん聞かせていただいた。話が俳句に及ぶと順氏は勘助からお宿に贈られたという俳句を披露してくれた。

みなかみは鶴の乙女か流れ芹

この句は勘助が越生の塩田家を訪ねた際に、当時、中学生だった順氏に贈ったものである。昭和二十五、六年のことである。越生の町の外れを越辺川（おっぺがわ）という清流が流れている。越辺川の岸辺を散策して帰ってきた勘助は短冊にこの句を書いて順氏への挨拶句として贈った。

もともと、この句は昭和二十一年の早春に服織村を流れる藁科川を散策した際に詠んだものである。原句は〈みなかみは鶴の乙女か流れ芹〉であった。勘助は過去に詠んだ俳句に手を加え、折に触れて挨拶句や贈答句とすることを楽しみの一つとしていた。順氏がこの句は自分のために詠まれ、贈られたものだと思っていたとしても少しも不思議ではない。そのように思い、信じこませてしまうのも勘助俳句の魅力である。なお、順氏もこれまでに数多くの俳句を読んでいる。その中から「父を偲んで」と前書きした一句を紹介したい。

貧と詩と父の生涯葛湯吹く

貧しさの中にあっても、文学を愛し、詩心を失わなかった父（章）を偲んだ句である。

さらには、次の句を。

人生の山場まだあり落葉踏む

「葛湯」も落葉も季語は冬である。父と自分自身の来し方を詠んだ句はしみじみとしていて味わい深い。

順氏にお会いしてから二ヵ月後のこと、ある日、突然一冊の手製の句集（複写）が郵送されてきた。それが、勘助自筆の句集であった。

この句集が勘助から塩田章氏に贈られたのは、彼がボルネオから帰還した翌年の昭和二十二年頃かと思われる。心配していた塩田氏の帰還を祝って、それまで書きためていた俳句の中から自選した作品を手製の句集にしたものである。句集を手にした塩田氏が喜んだ

ことは言うまでもない。習作とはいえ、勘助の上達ぶりには目を瞠るものがあった。句集には、まだ、題目が付けられていなかった。稲森道三郎氏が中勘助を鳥にたとえて「丹頂鶴」と呼んでいたように、孤高の文学者（詩人）の勘助には「鶴」のイメージがよく合った。

句集にも鶴を詠んだ一句が収められている。

鶴かうかうと夢を横ぎれり今朝の秋

昭和二十一年（一九四六）三月十日に知人に宛られた手紙に添えられた一句である。この句は随筆（日録）『羽鳥』の中では〈鶴かうかうと夢を横ぎれりけさの秋〉（傍点筆者）となっている。季語は初秋ではあるが、折に触れて知人、友人への挨拶句とするのが勘助の特色である。

五　塩田章氏旧蔵の中勘助直筆句稿「鶴」解題（新堀邦司氏による）

牡丹いけて夏の雲わく伏屋かな

「鶴」の巻頭を飾るのは「牡丹」を詠んだ初夏の句である。この句が詠まれたのは昭和二十一年（一九四六）五月十五日。執筆活動に忙しく、家に籠りきりだった勘助はひさしぶりに外に出て藁科川の近くを散策した。芽吹いたばかりの木々が眩しかった。五月の空に浮かぶ雲は早くも夏めいていた。

帰宅すると訪問客の姿があった。稲森道三郎氏であった。稲森氏は手土産に季節の花牡丹を二輪、それに蕨、山うどの精進揚げ、わさび漬けを持ってきていた。勘助はこれらの土産を喜んで受けとった。この時、松尾芭蕉の〈雪間よりうす紫の芽うどかな〉という句を思い出して稲森氏に聞かせている。早々に帰ろうとする稲森氏を引きとめ、夫人の和と共に三人で食卓を囲んだ。実の家族のような温かな夕食の一時であった。

稲森氏から贈られた美しい牡丹の花を活けて詠んだのがこの掲出句である。勘助はつづけて次の句を詠んでいる。

しづがやに貴妃おとづれし牡丹かな
ぼたんちれ真昼の夢のしろたへに
良寛の庵はうどの薫りして
こち吹くな老いは冷たし野蒜つみ

稲森氏から贈られた山うどの精進揚を前にして俳聖松尾芭蕉を想ったり、自らの住まいを良寛の庵（「五合庵」）に準（なぞら）えて、「牛鳴庵（ぎゅうめいあん）」と名付けたりして、勘助は詩歌の世界に遊んでいる。

ここからは、「鶴」句稿に収められた俳句の中から代表句を選び、ジャンル別に解題をしていきたい。

（一）　詩歌の伝統を踏まえた万葉調の作品

夕月やもらひ湯にくる春日巫女

俳句を作りはじめて間もない昭和十九年（一九四四）八月に詠んだ句である。

勘助が奈良東大寺の三月堂に仮寓したのは大正七年（一九一八）四月のこと。春爛漫の古都に滞在して歴史と古典の学び、文学的素養を培った。この時、勘助は三十四歳。和辻哲郎の『古寺巡礼』に「N君の話」として勘助のことが書かれている。

それから二十六年後の昭和十九年の八月になって、当時を懐古して次のように記している。

「私は奈良の三月堂のそばに仮寓して一日は下調べ、次の日は休養をかねて博文館へといふやうなしかたでくらした数十日は私に非常に大きなものを齎（もたら）したにもかかわらず、はじめて身をもって接する古代の文化に圧倒されて文筆のうへには何も残すことができなかった。それがやうやく今日になってその昔この胸の花園にこぼれた千古の種子が思ひもかけず忽然と詩歌の小さな華を咲かせた。今がはじめの花である。」（「樟ヶ谷」）

若き日に蒔かれた詩歌の種は長い歳月を経て芽を吹き、美しい花を咲かせたのである。古都で過ごした日々を懐古した俳句は万葉調の色彩を帯びていて、古代のロマンを感じさせる。この日に詠まれた俳句は全部で八句。習作とはいえ完成度が高い。

掲出句は「夕月や」となっているが、原句は「ゆう月や」となっている。詩歌の世界では「月」は秋を代表する「天文」とされている。「夕月」、「もらひ湯」、それに春日大社に仕える「巫女」を一句の中に収めて美しい世界を創作している。ロマンに満ちた回想句である。

他の回想句も古典的で味わい深い。

さすらふや恋にも古き奈良の京

袖ふるは藤の花かや奈良の京

をだまきの三輪にはひめし恋の酒

三句目は三輪山を詠んだもの。三輪山は山そのものが神として祀られている。古来から酒は神に献げる神聖なものとされているが、三輪山（大神神社）は酒の神様として有名である。新酒の季節になると、三輪山のご神木で作られた「杉玉」が全国の酒造所に送られる。「三諸杉」（みむろすぎ）をはじめとする名酒は評判が高く多くの人から愛飲されている。勘助もこの酒に酔い、古代の美女を想ったのだろうか。上五の「をだまき」（苧環）は春の花である。キンポウゲ科の多年草の花で、晩春にうつむきかげんに咲く青紫の花がおくゆかしく、詩心を誘う。

夢殿を花に埋めよ飛鳥風

この句も万葉調の作品である。声を出して読んでみると調べの良さがわかる。聖徳太子ゆかりの法隆寺と満開の桜を詠んだもの。「夢」「花」「飛鳥風」と詩の題材を揃えた「三位一体」の句である。懐想というよりも美しい幻想句。幻想の世界に遊ぶ勘助俳句の傑作といってよかろう。（「羽鳥」に収録）

同じような句に、

鹿ないて月に遊ぶや東大寺

がある。

つづいて京都の春を詠んだ句に、

友禅や祇園桜の夕まぐれ

がある。春に訪れた京都を懐古した作品である。

（二）転地療養時代（修行時代）俳句

若き日の勘助は、療養地や小説の構想を練る目的で寺院や神社に籠ることが多かった。

明治四十四年（一九一一）には北信濃の安養寺や野尻湖の琵琶島の宇賀神社の社務所に籠って独り静かに身を癒し作品の構想を練った。翌年も夏から秋にかけて琵琶島に籠り、帰京後は上野寛永寺山内の真如院に、三年後（大正三年）には比叡山横川の恵心堂に仮寓している。

比良比叡若葉影さす鳰（にお）の海

勘助が横川の恵心堂に仮寓したのは大正三年（一九一四）の六月、三十歳の時であった。ここで『銀の匙』の後編（原題『つむじまがり』）を書いている。

当時を回想して『樟ヶ谷』に次のように書いている。

「三十のときである。横川へは草刈りのほか誰もこなかったし、恵心堂には寺男の爺さんのほかには人がゐなかった。その爺さんも山をおりた。ある日の散歩の帰り門まで私を導いた道しるべを懐かしんだ。彼女は怖いけれども美しい。」

勘助を恵心堂の門まで導いてくれたのは斑猫（はんみょう）であった。きれいな昆虫である。童心に返って斑猫と遊ぶ勘助。〈斑猫とつれだち帰る恵心堂〉との句を残している。

「比良比叡」の句の季語は「若葉」で夏。下五の「鳰の海」は琵琶湖の別称。「鳰」は水鳥の「かいつぶり」のこと。「かいつぶり」は留鳥で湖や沼などに棲む。琵琶湖は夏冬を問わず水鳥の姿が見られるが、「かいつぶり」が多いことから「鳰の海」と呼ばれている。青葉若葉に輝く山の上から遙かな琵琶湖を眺めながら勘助は詩心を大いに養ったことであろう。句集には、

若葉して比叡いつぱい日の光

湖に鐘つき落とす比叡の寺

比叡の峰風吹きあげし二日月

などが収められている。三句目の「二日月」は秋の季語である。

鹿なくや奈良の若葉のうす月夜

奈良の若葉を詠んだ俳句はなかなか趣がある。寛永寺の真如院での想い出として詠んだ句には修行時代を想わせる静かな調べがある。

独り碁や笹に粉雪つもる日に

各地の寺に籠って詠んだ俳句は数多くあったが、何故か「鶴」に

はこれらの俳句しか収められていない。

療養といえば、比叡山に籠る一ヵ月前に長野県の軽井沢（追分）で過ごしている。

浅間は煙蓼科は雲鳥わたる

「鳥わたる」（鳥渡る）は秋の季語。この句がはじめて書かれた『樟ヶ谷』には〈浅間はけむり蓼科は雲鳥わたる〉（傍点筆者）となっている。同じく、軽井沢での詠に、

吹きなびけ浅間の野草秋の風

がある。

（三）静岡の田園生活を詠んだ俳句。

昭和十八年（一九四三）の十月から静岡県安倍郡服織村で四年半にわたる田園生活がはじまった。戦時下とはいえ、東京を遠く離れた服織村には静かな時間が流れていた。

勘助は和と共に豊かな自然に親しみ、村の人たちとの交流を深めた。田舎生活に慣れると野菜作りを楽しむようになった。家のすぐ前に杓子菜の畑があったことから自らの住居を「杓子庵（しゃくし）」と名付け、俳号を「杓子」とした。

勘助の俳句は、こうした心安らぐ暮らしの中から創り出されていった。

ひとつ家のひとつ砧に月一つ

杓子庵での詠。「ひとつ」（一つ）という語を三つ使った句のリズム感が心地よい。秋の夜、遠くの農家から藁砧を叩く音が聞こえてきた。外に出てみると清らかな月が杓子庵を照らしていた。秋の夜の光景をとらえたみごとな一句。さながら一篇の詩のようである。

西吹くな老いにつめたきのびるつみ

早春に吹く東風（こち）は温かで、人の心を和ませてくれる。それに比べて西風は春を忘れさせるほどに冷たく吹き荒れることがある。冬の間、杓子庵に閉じ籠りだった勘助は春の訪れを喜んで戸外に出てはみたものの、この日は冷たい西風の吹く日だった。楽しみにしていた、藁科川原での野蒜摘みも早々に切りあげて帰路についたようだ。上五の「西吹くな」から、残念そうな気持が伺える。（「野蒜摘み」は春の季語）

みなかみは鶴の乙女か流れ芹

昭和二十一年（一九四六）四月二日の詠。

前の句とは違って、この日は山間にほんのりと霧がたちこめる暖かな日であった。

勘助はこう書いている。

「藁科川の峡には茶釜の蓋をとったやうに蒸気がたちこめてぐるりの山山がほんのりと霞んでゐる。そのなかを網みたいに清らかに流

れる水。」（『羽鳥（二）』）

藁科川の清流に沿って散策していると、上流から芹の葉が流れてきた。芹摘みをしていた誰かの手から零れ落ちたものなのだろうか。乙女が落とした芹にちがいない。勘助らしい想像である。春の温かさがそうした想像をもたらしたのかもしれない。「芹」は春の季語。早春にふさわしい一句である。

藁科川を詠んだ俳句に次の俳句がある。

わらしなや夢を流して石の音

この句には季語はないが、春を想わせる一句である。

短日の芋を洗うてくれにけり
農鳥に勇や田子の粟田まき
山家しぐれてけずる牛蒡のかおるかな

などの句もこの時代の勘助の暮らしぶりをよく物語っていて興味深い。

（四）愛する人たちへの追悼。生死を見つめた俳句。

亡き人のかたみの珊瑚春浅し

勘助は父、母をはじめとして肉親や愛する人たちの死に何度も遭ってきた。

とりわけ、昭和十七年（一九四二）は生涯で最も悲しい年ではなかったか。

この年の四月に兄嫁の末子を、七月には長年わが娘のように愛情を注いできた親友・江木定男の長女妙子を、さらには十月には兄の金一を喪っている。深い悲しみのうちに『蜜蜂』『妙子への手紙』を書いている。『蜜蜂』は中家の重荷を背負っている蜜蜂のように働きつづけた末子の死を悼んで書き著した作品である。

提出句の「珊瑚」は亡くなった女性が大切にしていた簪のことかと思われる。下五の「春浅し」から、冷え冷えとした寂寥感が伝わってこよう。

「鶴」句集には親しい人たちの死を悼んだ句がたくさん収められている。

亡き母が添乳にくる花きりぎりす
みうちみな佛になりぬ草の市
こけしには親兄弟もなかりけり

そして、後に残された者の寂しい心境を次のように詠んでいる。

星満天雲のゆくべき道もなし
またひとりどこへ行くらん秋の道
人の世をしぐれてやれし旅の笠

六　塩田章氏旧蔵中勘助直筆句稿「鶴」解題

（木内による）

表1中の六葉目133番目の句「うたて世に生死一重の紙芝居」について解説する。この句には季語はない。

この句は前出先行論文、①稲森道三郎「五　年譜―服織の四年半―」『服織の中勘助』（私家版、一九五六・一二）によると、一九四八年一月に創作され『自由詩人』〈一九四八年一二月号に寄稿された「詩二つ」の一方「こま」に関連すると考えられる。この詩の背景として稲森家の正月に同年一月三日に呼ばれたことが契機となりつくられたことが日記体随筆「羽鳥」より分かる。単行本『白鳥の話』にも掲載された。

障子ひとへのあの世とこの世（傍線筆者）
こまをまはせや夢のまに
西瓜まはれば蜜柑もまはる
まはるはずだよ独楽ぢやもの
茄子はむらさき赤とんがらし
きいな瓢箪みそをする
さつさ　すゐか　すゐか
昭和二三、一、一四

当該句「うたて世に生死一重の紙芝居」の第二句「生死一重の」が「障子ひとへの」の発想に繋がったことは言葉の音を重視した詩人中勘助の特質を考えると当然と言えよう。次に第一句「うたて世」第三句「紙芝居」について詩との関連を確認すると角川書店版『中勘助全集』〈第一一巻〉収録の詩「紙芝居」が浮かび上がる。

節季しはすの寒空に
向う横町の風蔭で
つひぞみかけぬ飴屋さん
子供あつめて紙芝居
ありやー　じんじん
ヤツと一枚ひきぬけば
三三九度の場はきえて
あんどんあける猫の怪
うき世さまざま裏店に
親子いくたり日ぐらしの
くふとくはぬはうら表
ただ一枚の紙芝居
昭和二十二年十二月二十二日
（傍線筆者）

以上より、中勘助が「うたて世に生死一重の紙芝居」の句を中心に詩を創作していったことが分かる。「こま」においては音の点、「紙芝居」では「うたて世」「紙芝居」の象徴及びイメージの点で中勘助にとって句作は詩作の原点となっている。この点において、前出先行論文④村山古郷「中勘助の俳句」『文人の俳句』（桜楓社、一九六五）及び⑥清見北斗「中勘助」〈鑑賞・文人の俳句・10〉『ゆく春』〈七〇・四〉（一九九七・四）の指摘である、夏目漱石の影響を

考慮に入れるべきだろう。中勘助は一高に続き、東京帝国大学英文科において、漱石の「文学論」授業を受講した学生であった。漱石の「文学論」の冒頭（第一編第一章は「文学的内容の形式（F＋f）」（Fは焦点的印象又は観念、fはこれに付着する情緒を意味する）の解説に充てられている。中勘助の俳句がF焦点的印象であるならば、中勘助の詩はFに付着する情緒fを言葉で表現しFに加えたものではないだろうか。短歌二首を一連、二連に組み合わせて一つの詩にした[1]「わが庵に花はなけれど」（『琅玕』）例があるので、今後、俳句・短歌・詩を比較していく必要があるだろう。

七　おわりに

塩田章氏旧蔵中勘助直筆句稿に関して、塩田章氏の詞書及びあとがきが素直に状況を語っているが、最後に当時の中勘助の塩田章氏再会時の回顧を記す。一九四八年五月六日付島田豊子・秀子宛書簡に「ボルネオ帰り、マラリヤ、デング熱その他の病気あげくと栄養失調、南洋ぼけ等で痩せ衰へへんに黒くふらふらになつてゐた。（中略）俳句は先方が数十年の先輩だが見せたら兜をぬいだ」とある。つまり塩田章氏旧蔵中勘助直筆句稿は中勘助にとって自信作であった可能性が高い。

その俳句は新堀氏によって四種に分類されその特徴は明らかとなった。木内の解題により、作句が中勘助の詩作に与えた音、象徴、イメージにおける影響が確認できた。

今後の課題として、本論「一　はじめに」に記した通り、「沼のほとり」「しづかな流」等の日記体随筆作品に収録された中勘助の短歌に関する論考についても触れ、中勘助短詩型文全体として確認していくことを挙げる。

注

（1）　木内英実「戦中・戦後の教科書教材としての中勘助作品の位置づけ」『東京都市大学人間科学部紀要』（第一二号）（二〇二一・三）

引用・参考文献

・稲森道三郎『服織の中勘助』（私家版、一九五六・一二）
・稲森道三郎『一座建立　中勘助の手紙』（六興出版、一九八七・七）
・稲森道三郎『随筆集　花追い』（アイデア、一九九八・一二）
・赤羽淑『中勘助の俳句』『文芸研究』（第四三集）（一九六五・三）
・角川源義「中勘助さんの俳句」『俳句』（十四巻六号）（一九六五・六）
・村山古郷「中勘助の俳句」『文人の俳句』（桜楓社、一九六五）
・石塚友二編『文人俳句歳時記』（生活文化社、一九七〇・四）
・清見北斗「中勘助」（鑑賞・文人の俳句・10）『ゆく春』（七〇・四）（一九九七・四）
・新堀邦司「中勘助と俳句（1）」『日矢』（二〇一七・一）
・新堀邦司「中勘助と俳句（2）」『日矢』（二〇一七・二）
・新堀邦司「中勘助と俳句（3）」『日矢』（二〇一七・三）
・『漱石全集』（第一八巻　文学論）（岩波書店一九七九・八）
・和辻哲郎『古寺巡礼』（岩波文庫）（岩波書店、一九七九）
・鈴木範久『中勘助せんせ』（岩波書店、二〇〇九・一二）
・『中勘助全集』（岩波書店、一九八九～一九九一）
・『中勘助全集』（角川書店、一九六一～一九六五）

謝辞

塩田章氏旧蔵中勘助句稿の翻刻に関しご許可くださいましたご遺族の塩田惠氏及び北村順氏、塩田章氏旧蔵中勘助句稿写真資料を提供くださいました静岡市文化振興課宮崎係長、共に二〇二一年四月に静岡市より招集された塩田章氏旧蔵中勘助句稿静岡市受け入れ審査委員であり、紆余曲折がありました本資料

に関し新堀氏及び木内による研究調査を許諾くださいました細川光洋氏及び奥山和子氏に感謝申し上げます。
また、巻末表2における季語による分類に関しては新堀邦司氏及び紅書房社長菊池洋子氏のアイデアであることを付け加えます。両氏に加え表1及び表2の編集にご協力くださいました杉崎美和氏に感謝申し上げます。
本研究は科研費二〇一九年度 基盤研究（C）19K00329の研究成果の一部である。

巻末表2「塩田家（「雀のお宿」）宿帳記載中勘助俳句翻刻及び『中勘助全集』等収録中勘助俳句一覧「季題別」
表2凡例 「『中勘助全集』照合」欄
「『中勘助全集』照合」欄 ⑨190・291 岩波書店版『中勘助全集』第九巻 p.190 及び p.291 に登場する。

塩田家宿帳

1	季語なし107	この友と汲めばや母のちちぶ酒	昭二四・三・三〇
2	春102	囀りや雀の宿の宝子ら	昭二四・三・三〇
3		越辺川梅さく岸の草のやは	昭二四・三・三〇初出
4		よき人すますこし生の里	昭二四・三・三〇初出

春の部

No		季語	中勘助句	岩波書店版『中勘助全集』との照合
1	時候	春	亡き人の琴のそら音や夜半の春	⑨223⑭藁科
2			還暦の春に酒なし冴えかへる	⑨264
3			興亡の春ほのぼのと霞みけり	⑨266
4			日輪を讃すれば春湧ききたる	⑨327
5			鶯に小袖かさばや春夜寒	⑨341⑪176⑭藁科
6			亡き人のかたみの珊瑚春あさし	⑨399⑭藁科
7			春の星むかし西施がふくみ玉	⑨403⑭藁科
8			玉を煮て仙薬をとる飢餓の春	⑩16
9			飢ゑも春のどかに鳥の話をかく	⑩26
10			鳥ないて春のたまりし山わかな	⑩37
11			春一日お日をたたへて過しけり	⑩40
12			さすらひの春をうづらの雑煮かな	⑩157
13			ゐづつめと別るる春の霰かな	⑪114
14			山里の春ほろにがし蕗の薹	⑪166
15			白鹿に寿老めきたり古稀の春	⑪130
16			春くぞとふれ来し甘鯛奴かな	⑪167
17			雪国の椎茸ぬくしけさの春	⑪171
18			仏前のくわゐにおけや春の露	⑪177
19			うらぶれの春をうづらの雑煮哉	⑮414 昭二二・一・二石井正之助宛
20			梅の里鶴をたづねて春ひと日	⑬52
21			古稀の春筑紫の鯵や灘の酒	⑯429 昭二九・二・一三稲森道三郎他宛
22			わらしなに霞を流せ御代の春	⑩360
23		春浅し	ふとふれし鬢のかをりや春浅し	⑨199⑭藁科
24		春寒し	春寒し椎茸をやく納屋住居	⑩27
25			春たつ日庵にまづくる鳥は誰そ	⑨258
26		春立つ	裸木に鳥いく羽きて春立ちぬ	⑪27
27		たつ春	たつ春のくれなゐ浅しひの菜漬	⑪336
28		春日	興亡の野をおし照す春日かな	⑨401
29		新春	さすらひの春をうづらの雑煮かな	⑩157
30		暮の春	貴妃が肌に珊瑚汗ばむ暮の春	⑨403⑭藁科

31	時候	日永	おきめ召す鐸の音する日永かな	⑨327
32			ひとつ鳥の啼きつづけたる日永かな	⑨402
33		残雪	残雪や土鍋にくゆる灘の粕	⑯247 昭二七・二・二三橋本武宛
34		彼岸	年めして彌陀もゐねぶる彼岸ばれ	⑬174
35	天文	霞	鐘の音や霞にしづむ東大寺	⑨186・290⑭藻科
36			興亡の春ほのぼのと霞みけり	⑨266
37			麦をふんで霞をわかす山わかな	⑩358
38			ゐづつめと別るる春の霰かな	⑪114
39			わらしなに霞を流せ御代の春	⑩360
40		春風	春風の野山をわたる雲の影	⑩196
41		春の嵐	阿蘭陀のかんざし船や春の風	⑪114
42		朧月	飛鳥人と恋をせん奈良の朧月	⑨186・290⑭藻科
43		朧夜	朧夜の君鶴ににて怨じけり	⑨188
44		陽炎	陽炎や駱駝連れゆく絹の道	⑪171
45		風光る	み神楽の鈴や御幣や風光る	⑨401
46		こち	こち吹くな老いは冷たし野蒜つみ	⑩52
47		東風	海東風の花吹きあぐる徳願寺	⑩375
48		貝の風	乙姫の琴爪もよせよ貝の風	⑪114
49		農鳥	南無仏と魔道をゆけば霾るや	⑨400⑭藻科
50			農鳥に勇むや田子の粟田まき	⑨400⑭藻科
51	地理	春の潮	八幡船押しあぐる春の潮かな	⑨206
52		春の海	鯨追ふ鯱のきほひや春の潮	⑪220
53		春泥	春泥や群鹿かけるえびす国	⑪177
54		桜漬	帰る雁つとは越生のさくら漬	⑪83
55	生活	花漬	花漬にほのめく奈良のかをり哉	⑮366 昭二・五・六島田豊子・秀子宛
56		茶つみ	琴の音もそふや手越の茶つみ唄	⑩75
57		茶摘み	ゆめちさし妹がはとりの茶つみ笠	⑪111
58			京ちかき日野はめでたき茶つみ哉	⑫32

59	生活	摘草	老いらくの摘草に日の恵み日のめぐみ	⑩201
60		巣箱	諸悪莫作なぞと巣箱のこがら哉	⑪149⑫210
61		蜆汁	ふじ明けて御殿場寒し蜆汁	⑬190
62			不具の子のか細くあげぬとんび凧	⑪111
63		凧	きれ凧の奈落におつる達磨哉	⑯227 昭二三・九・一七稲森道三郎宛
64		種まき	種まきや今度顔出す苗はなに	⑮309 昭一九・九・二小宮豊隆宛
65		土筆つむ	敗戦の野につむ老のほけ土筆	⑪136
66		つくし	老いがつむ小籠にかろきつくし哉	昭二二・四・一三塩田章宛
67			わが国のつくしとおぼせ南無ほとけ	⑩41
68		菜飯	落人に菜飯うめぼしあらたふと	⑨222
69		干鱈	酒を得て干鱈をあらふ筧かな	⑩35
70			地酒くんで干鱈にすすむひばの飯	⑩35
71		花見	漂浪四年鬚みな白き花見かな	⑩200
72		春愁	春愁の鶴しどけなき黒の帯	⑪21⑭藻科
73		壺焼	壺焼の磊磊として灘の酒	⑭289
74		花見	家鳴りして天狗花見に鞍馬山	⑫74
75		花御堂	小仏を祝ふてあげん花御堂	⑯30 昭二三・一〇・二塩田章宛
76		桃の節句	金太郎もまぎれて桃の節句かな	⑯52 昭二四・三・七稲森道三郎宛
77		雛	舞の袖かへりて雛の影うごく	⑪114
78			はぜめして恋をかたらすひひな哉	⑪19⑭藻科
79			しづかなる雨にあしたの雛をかざる	⑪140
80			かきよせの雛にひし餅ももの花	⑪140
81			雪の日をそぼそぼしまふ雛かな	⑪141
82			くつろいで雛もめしませ桃の酒	⑯51 昭二四・三・四稲森道三郎宛

| | | |

137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165
植物																												
梅					梅の花	紅梅		桃		藤の花	ぼけ	こぶし		連翹	山吹	柳	雪柳	蕗の薹		うど	茗荷たけ	野蒜	芹		芹よもぎ	をだまき	木の芽	海棠
梅見ばや竹の細杖鶴の脛	梅はやし山わは小鳥炭けぶり	梅の里鶴をたづねて春ひと日	梅いけて古疵うづく余寒かな	金時と姥が酒くむ梅の春	あれ寺の仁王はこけて梅の花	紅梅にふはとかかりぬ昼の月	紅梅の宿にもどれば雛の客	桃いけて寸のこけしを愛す	桃いけて病夢にきはふ雛祭	袖ふるは藤の花かや奈良の京	ぼけ咲いて日雀小雀のくる日かな	君が門こぶし花さくうす月夜	山姥とめでてし雨のこぶし哉	連翹やよらでぞすぐる君が門	山吹に田水ながれて筵ばた	日の暈や柳もえたる土堤の路	きめこみの花子に散るや雪柳	山里の春ほろにがし蕗の薹	人のなさけ箕にはからばや蕗のたう	良寛の庵はうどの薫りして	もろてさてなにを忘れん茗荷たけ	こち吹くな老いは冷たし野蒜つみ	溝川に芹の根あらふ雪解水	みなかみは鶴の乙女か流れ芹	芹よもぎ飢餓の春野もつみきれず	をだまきの三輪にはひめし恋の酒	鼻高と酒くまん月の木の芽漬	海棠にしづ心なき尼僧かな
⑩162	⑩361	⑬552	⑬209	⑫313	⑩222	⑨265	⑨273	⑩202	⑬4	⑨186・290⑭藻科	⑩37⑭藻科	⑨403	⑪175	⑪159	⑨323	⑩40	昭二二・二・四稲森道三郎宛	⑪66	⑪141	⑩52⑭藻科	⑨205	⑩52	⑨267	⑩39	⑩49	⑨186・290⑭藻科	⑨199⑭藻科	⑪111

夏の部

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
時候												天文										
夏	初夏	入梅		短夜		涼し						夏の雲	青嵐			梅雨			五月雨	雷		
金閣寒し誰が衣笠にのこる夏	初夏の廚涼しき蕗の風	茶に晴るゝついりの病みのねざめ哉	かき餅の黴うつくしき梅雨かな	桶仙がむさとおびえて明けやすき	機をたつや親子のえにし短夜に	すず風の袂に入りし小蟬かな	涼しさや扇なげうつ瀬田の橋	涼しさや清水につけしつぼの籠	初夏の廚涼しき蕗の風	涼風を落すや雨後の檜山	比叡すずし信長寺を焼きすてて	牡丹いけて夏の雲わく伏屋かな	青嵐京は三千八百寺	忘れ庵ほどき去られて青嵐	野の宮や竹千竿の青嵐	つゆ曇り鐘の音こもる円覚寺	つゆの宿手越の新茶麦粉菓子	枇杷いけて唐めくつゆの書斎かな	さみだれの十薬いけし白磁かな	いかづちや千町白む蓮の雨	敗戦や雷のくづれがへそを売り	目に青葉へそでほろ酔ふ小雷
⑯368 昭二八・七・二〇塩田章宛	⑨321	昭二四・六・一五稲森道三郎宛	⑪105	⑨118・290⑭藻科	⑨402⑭藻科	⑨189⑭藻科	⑨189⑩35	⑨178	⑩256	⑨321	⑨209	⑩52⑭藻科	⑪176⑫12	⑯64 昭二四・五・二八稲森道三郎宛	⑫13・90	⑫188	⑯199 昭二六・六・二五稲森道三郎宛	⑪105	⑪7	⑪205	⑯138 昭二五・七・一一稲森道三郎宛	⑯267 昭二七・六・一三稲森道三郎宛

24	天文	炎天	炎天に肥煮る釜のたぎり哉	⑩275⑭藻科
25	天文	油照	御詠歌の調子はづれて油照り	⑪111
26	地理	夏の山	夏山を響かすこまの叫びかな	⑪113
27	地理	土用波	百万の霊のせてくる土用波	⑩299
28	地理	清水	涼しさや清水につけしつぼの籠	⑨178
29	地理	清水	白鳳のみ足すすがせ苔しみづ	⑪310
30	地理	清水	無仏寺の蕎麦につめたき清水かな	⑪310
31	地理	清水	山だちもともに舌打つ清水かな	⑪319
32	生活	単衣	老尼はや我もひとへの恋衣	⑯368 昭二八・七・二〇塩田章宛
33	生活	麦飯	麦飯に干鱈たふとき侘居かな	⑨204
34	生活	鮓	また逢ふや命なりけりにぎり寿司	⑪35
35	生活	胡瓜揉・瓜揉	塩つよき能登の瓜漬麦茶づけ	⑯408 昭二八・一一・二八塩田章宛
36	生活	甘酒	あま酒汲む杓子も友も老いせぬや	⑮380 昭二一・七・一九稲森道三郎宛
37	生活	甘酒	土瓶さげて甘酒踊るかうぢのや	⑩74
38	生活	新茶	つゆの宿手越の新茶麦粉菓子	⑯199 昭二六・六・二五稲森道三郎宛
39	生活	新茶	若葉して命めでたき新茶かな	⑩57
40	生活	扇	三条や姥美しき扇折り	⑯548 昭三〇・一〇・二八稲森道三郎宛
41	生活	扇	涼しさや扇なげうつ瀬田の橋	⑨234⑩35
42	生活	走馬灯	走馬燈ながめて更けし独居かな	⑪14
43	生活	田植	田植ゑすんで音なき村にうす月す	⑩251
44	生活	簗	老いぎれし我やかからんくづれやな	⑮312 昭二〇・二・一三小宮豊隆宛
45	生活	麦笛	うらさびし麦笛ふかん山の畑	⑩210
46	行事	端午	老いせぬや鯉の影うく菖蒲湯	⑮431 昭二二・五・九稲森道三郎宛

47	行事	端午	木香に酔ふ菖蒲人形の威勢かな	⑯43 昭二四・一・二五稲森道三郎宛
48	行事	端午	金太郎はへそでのむらん鯉節句	⑯511 昭三〇・五・六稲森道三郎宛
49	行事	端午	鯉たてよ宿はこけしの初節句	⑩62⑭藻科
50	行事	端午	ひと張りの緋鯉に喜寿の節句かな	⑫283
51	行事	端午	目に青葉へそくふ五月人形かな	⑯194 昭二六・六・五稲森道三郎宛
52	行事	幟	深大寺五月幟や水ぐるま	⑪309
53	動物	羽抜鳥	影や人わが名をしへよ羽ぬけ鳥	⑨234
54	動物	羽抜鳥	羽抜鳥一羽残つてたちもせず	⑨234
55	動物	時鳥	ほととぎす鬼童が牛をかづく夜に	⑨189
56	動物	時鳥	山姥の茶せようの花ほととぎす	⑬61
57	動物	郭公	老いらくの山に鳴くかや閑古鳥	⑨290⑭藻科
58	動物	郭公	山荒れの石原ゆけば呼子鳥	⑩193⑭藻科
59	動物	郭公	山かげにあれは我かや呼子鳥	⑬139
60	動物	虎鶫	鬼女の恋におぢていづればぬえこどり	⑪14
61	動物	蔑切	しらぬ旅路に日は落ちかけて行行子	⑩53
62	動物	翡翠	紅さしてかはせみかよふ島びさし	⑨259
63	動物	鷸	から川のけふは流れて鷸の宿	⑩63
64	動物	鵜	鵜の声をききつつさ夜のひとり風呂	⑬197
65	動物	鵜	鵜のやつこつくばひ迎ふ南柯の守	⑬197
66	動物	鵜	みづ舟にひとりぬれゐる荒鵜かな	⑨290
67	動物	鵜	すて舟にひとり濡れゐる荒鵜かな	⑨187・290
68	動物	水鶏	伊賀の山の谺きかばやくひな笛	⑪338
69	動物	水鶏	ゐぬ鳥を市によぶかやくひな笛	⑪338
70	動物	水鶏	くひな笛ふく息ほそし老の病み	⑪338・336
71	動物	水鶏	この庵を吹きかたぶけんくひな笛	⑪338
72	動物	水鶏	修羅の世をけふはくひなの雑煮かな	⑩158

73	大瑠璃	信濃路の若葉にるりをきく日かな	⑨184・289⑭藁科
74	四十雀	ひがらこがら四十雀みなかはいらし	⑨291
75	山雀	やまがらの市に芸するあはれなり	⑪112
76	日雀	ひがらこがら四十雀みなかはいらし	⑨291
77	山女	島守に村人たびぬあめの魚	⑪111
78	鰹	鰹万貫へそうる男はせあるく	⑪35
79	鮀	石川に鮀すくふ翁暮れにけり	⑨290
80	蟹	朝網や蟹もまじりて魚しぐれ	⑨209⑭藁科
81	蟹	蟹赤きさらさら川や芹の花	⑩63
82	蟹	蟹うにのはつ酔ひさびし仏の日	⑬54
83	蟹	海底に蟹の嘆きやもちの月	⑪111
84	火取虫	やごとなき小忌の衣や火とり虫	⑩48
85	蛍	もらひ湯の蛍つためき山の風	⑩292
86	天牛	無花果を天牛の嚙む闍伽井かな	⑪20
87	斑猫	斑猫とつれだち帰る恵心堂	⑨185
88	鼓虫	ひとつ葉にまひまひ隠る詩仙堂	⑫48
89	鼓虫	まひまひて仏になるか水すまし	⑪19
90	蟬	裏みれば長きに似たり蟬の顔	⑪20
91	蟬	かへらじといづるわが家の蟬しぐれ	⑪159
92	蟬	ききえたり古あれ寺の蟬の声	⑫39
93	蟬	すず風の袂に入りし小蟬かな	⑨189⑭藁科
94	蟬	蟬鳴いて落ちて秋きぬ忘れ庵	⑩130
95	蟬	みんみんの玲瓏として生まれけり	⑮312 昭二〇・二・一三
96	蚊	長範も蚊にさされけり薪能	⑪205
97	蚤	虎にねて豊干は蚤にくはれけり	⑨189 290⑭藁科
98	羽蟻	六尺の小庭にぎはふ羽蟻かな	⑪19
99	蜘蛛	国破れて蜘蛛に宿かる山居かな	⑩108
100	蜘蛛	南無阿彌陀蜘蛛に生れで忘れ庵	⑩274

101	牡丹	大鐘の音に花さく牡丹かな	⑫23
102	牡丹	汲むほどに杓子も酔ふや牡丹酒	⑩213
103	牡丹	しづがやに貴妃おとづれし牡丹かな	⑩52
104	牡丹	白き瓶に臙脂したたる牡丹かな	⑩48
105	牡丹	白藤のしづかにはべる牡丹かな	⑮360 昭二一・四・一六稲森道三郎宛
106	牡丹	牡丹いけて夏の雲わく伏屋かな	⑩52⑭藁科
107	牡丹	ぼたん散れ真昼の夢のしろたへに	⑩52⑭藁科
108	牡丹	若葉して京は牡丹の乙女かな	⑯368 昭二八・七・二〇塩田章宛
109	梔子の花	くちなしに酔うてしどろの夢路かな	⑮326 昭二〇・七・一五飯尾（鈴木）廣子宛
110	杏	虻のねて音なき杏月夜かな	⑨400⑭藁科⑮350 昭二一・三・五稲森道三郎宛
111	枇杷	枇杷いけて唐めくつゆの書斎かな	⑪105
112	枇杷	枇杷の精おとづれし日の風甘き	⑩252
113	若葉	甘酒や若葉清水東山	⑯368 昭二八・七・二〇塩田章宛
114	若葉	甘酒や若葉底なき崖の茶屋	⑫5
115	若葉	春日若葉みこは白絹あまき酒	⑨186・290⑭藁科
116	若葉	関八州若葉になびく鯉幟	⑪19⑭藁科
117	若葉	こま鳴くやくろぼのねろは若葉して	⑭289
118	若葉	鹿なくや奈良の若葉のうす月夜	⑨402⑭藁科
119	若葉	信濃路の若葉にるりをきく日かな	⑨184・289⑭藁科
120	若葉	奈良若葉あしび花さく手向山	⑨186
121	若葉	ひら比叡わか葉影さす鳰の海	⑨185⑭藁科
122	若葉	吹井して若葉に汗を拭はばや	⑫92
123	若葉	みかぐらや若葉影さす春日宮	⑨204
124	若葉	若葉して京は牡丹の乙女かな	⑯368 昭二八・七・二〇塩田章宛

125	植物	若葉	若葉して比叡いつぱいの日の光	⑨185・289⑭藁科
126			若葉して命めでたき新茶かな	⑩57
127		青葉	目に青葉へそくふ五月人形かな	⑯165 昭二六・六・五稲森道三郎宛
128		卯の花	うの花とふりこめられて侘茶かな	⑩58
129			うの花やいせをの巫女の小忌衣	⑬164
130			うの花や宇治芦久保の茶のかをり	⑪35
131			うの花や小鮎さばしるほそ流	⑨209
132			うの花をわらしなに流せ青嵐	⑩383
133			詩狂して世をうの花の仮居かな	⑬164
134			山姥の茶せようの花ほととぎす	⑬61
135		桐の花	桐の花茶つみの人眠げなり	⑩57
136		楝の花	蒸しこもる黒ばえにさく楝かな	⑪58
137			盲目に草履花さけ楝の家	⑪64
138		合歓の花	いはけなき恋はあやなし合歓の花	⑪19⑭藁科
139		若竹	若竹にちさき姫もや柴屋寺	⑨342⑩28
140		芍薬	わが日ぞと芍薬いけてちらし寿司	⑬8
141		向日葵	日車のまはりをへたる夕べかな	⑪105
142			日車や暄嘩でこいと軍鶏闘す	⑨395
143			尼君のあくび小さき蓮の朝	⑪105
144		蓮の花	蓮さいて親子は夢のわかれ哉	⑫191
145			蓮万朶白雨すらん彌陀の国	⑩104
146		百合	人も愛し越生の百合や能登の茄子	昭三〇・一二・二一加藤喜美子宛
147		菫の花	菫の花に南蛮いけて鬼女の庵	⑩307
148		筍	小病みして京の竹の子山の蕗	⑪42
149			孫のみやげ竹の子やはき節句かな	⑪147⑫108
150		蕗	小病みして京の竹の子山の蕗	⑪42
151			白雨や蕗の葉かへす山の風	⑩53
152			初夏の廚涼しき蕗の風	⑨321

153	植物	瓜	子宝やかぼちや太郎瓜次郎	⑩92
154			塩つよき能登の瓜漬麦茶づけ	昭二八・一一・二八塩田章宛
155		夕顔	床に夕顔厄日ちかづくざんざぶり	⑬35
156		茄子	人も愛し越生の百合や能登の茄子	昭三一・一二・二一加藤喜美子宛
157		茗荷	十五城を豊子にわたせ茗荷の子	⑨387
158		麦	老いもふけ麦の風やらそばの風	⑩61
159			黒穂ぬく老いをな吹きそ山の風	⑨313
160			さすらひて小箕よ乙女よ黒穂とり	⑨313
161			慈雨よ慈雨山にふり麦にふれ	⑨259
162			麦うまし雀の宿のゆかりにて	⑯261 昭二七・五・二二塩田章宛
163		玉蜀黍の花	韮の花に南蛮いけて鬼女の庵	⑩307
164		草いきれ	海龍王寺丈なす草のいきれ哉	⑫39
165		風蘭	風蘭の病む子は遠きかをり哉	⑪185
166		昼顔	ひる顔に米つきすずむあはれなり	⑨150
167		藜	たがためにあかざ紅さす山の畑	⑨159・289
168		萱草	萱草の花に霧ふく峠かな	⑨204
169		十薬	十薬の花も風情やつゆの庵	⑩242
170			毒だみの花も風情や忘れ庵	⑮433 昭二一・六・九稲森道三郎宛
171		黴	かき餅の黴うつくしき梅雨かな	⑪105

1	秋の部	時候	秋	秋の森に鳴かぬ鳥きくつんぼ哉	⑫211
2				鐘つけや古仏ます秋の寺	⑪317
3				川のりの薫る夕げや秋の庵	⑩304
4				ささがにの衣ぬぎおきつ庵の秋	⑩117
5				さをしかが巫女に恋する奈良の秋	⑪54
6				炮烙や秋かんばしく胡麻を炒る	⑨206

32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7
天文	時候																								
秋晴	秋の日	秋深し			夜寒	朝寒	秋寒	冷やか			秋の暮			秋の朝	残暑	立秋				秋					
秋ばれの味噌桶しめる槌の音	雲のかげ廃墟をかけり秋日刺す	鬼灯のさびさびあせて秋ふけぬ	納屋ずみの糠味噌もなく秋ふけぬ	秋ふけて土にころがる羽虫かな	をさの風身にしむ越の夜寒かな	あさ寒の肉桂を嚙む侘居かな	鬼に瘤をとられし宵やそぞろ寒	ふき水の玉ほとばしる小手の冷え	炭なくて鴨になりたき老いの冷え	ささ冷えの庵にしらじらうつぎ哉	なにとなく木の実かなしき秋の暮	この瓢に誰ぞゐぬかや秋の暮	奥山のきのこと朽ちん秋の暮	おんおんと駝鳥声さびし秋の朝	日もすがら小屋の牛鳴き残暑煮ゆ	鶴かうかうと夢を横ぎれりけさの秋	蟬鳴いて落ちて秋きぬ忘れ庵	秋立つや秘蔵のるりの音を絶えて	秋きても笑ふ布袋の土仏かな	そばへきて琴の音をなけ秋の鳥	近うきて琴の音をなけ秋の鳥	秋白し笊にほしたる西瓜種子	宮嶋の杓子にすくへ秋の味	百舌やとき秋やはおそき栖林	またひとりどこへゆくらん秋の道
⑩383	⑨376	⑬251	⑨376	⑨400	⑧19⑨209⑭藻科	⑩338	⑪113	⑫16	⑩154	⑩222	⑩383	⑪15⑭藻科	⑮313 昭二〇・二・一三小宮豊隆宛	⑬174	⑩107	⑨27・290⑩28⑭藻科	⑩130	⑫234	⑨400⑭藻科	⑰60・61 昭三一・一〇・一四庄司辰雄宛他	⑰64 昭三一・一〇・三〇今村小百合宛	⑩292	昭二九・一〇・二六稲森道三郎宛	⑨200	⑮313 昭二〇・二・一三小宮豊隆宛

58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33
天文																									
月																			秋高し	秋の声		秋晴			
山峡は月にあふれて鷺の声	山姥に蹴られてでたり峰の月	ひとつやの一つ砧に月ひとつ	日枝の峯風ふきあげし二日月	露恋を尼とかたらん嵯峨の月	月や鐘茶粥にやする奈良の坊	月ひとつわすれかねたり忘れ庵	月は三笠いづこにをはす香薬師	月はすは奈落におちて風の音	月に冷えてかへる山峡二里の水	月叫ぶ夜はもあらんアッツ島	月影やさよもふくろの手水鉢	千町田の月の垂穂のかをり哉	大海や日夜日をのみ月をのむ 昭一九・九・二小宮豊隆宛⑮309	背戸に出てきぬぎぬの月みつけたり	残月や魚と化したる夢さめて	かま風呂の肩にしみけり山の月	温泉に貴妃まどろめり朝の月	うき恋を尼とかたらん嵯峨の月	天高し九方皐馬を見つけたり	みそぎして寄せくる秋の声きかん	伯牙がたつ絃のひびき秋の声	鳩虫は土にころげて秋日和	すしの香や客待つ朝の秋日和	秋日和南柯印なり猫老いぬ	秋晴れやわれも野の人野の仏
⑨402⑭藻科	⑨402	⑨190・291⑭藻科	昭二〇・一二・一三小宮豊隆宛⑮337	昭二八・七・二〇塩田章宛⑯368	⑨402⑫24⑭藻科	⑩112	⑫19	⑩383	⑨399⑫237	⑨259	⑫53	⑩317	⑮309 昭一九・九・二小宮豊隆宛	⑪38	⑩332	⑩340	⑨187・289⑭藻科	⑫17	⑨189・290⑭藻科	⑨178・290⑭藻科	⑨234	⑪59	⑪118	⑬174	⑬97

| | | |

112	うき恋を夢野の鹿と語らばや	動物	鹿
	さをしかが巫女に恋する奈良の秋		
113	154		
114	鹿ないて月に浮ぶか東大寺		
	333		
	昭二〇・一一・一五松原君子宛		
115	月に吠ゆる雄鹿たくまし法華堂		
	185 24		
116	浅間はけむり蓼科は雲鳥わたる		渡り鳥
	204		
117	星満天雁わたるべき道もなし		
	190		
118	百舌の朝鉈とぐ砥の匂かな		鵙
	225		
119	もず笛も叫ぶやうらら二月堂		
	115		
120	百舌やとき秋やはおそき楢林		
	200		
121	山かげの柿照る村や百舌日和		
	330		
122	苔寺やつぐみの宿はどこやらん		鶫
	223		
	昭二六・一〇・三一坂村真民宛		
123	山茶花やつぐみ苔はぐ寺の庭		
	205		
124	四五十羽山わをめぐる鶫かな		
	337		
125	ひよ鳴いて庵にぎはふつるし柿		
	226		
126	ひよ鳥とのぞいてきたり柴屋寺		
	236		
	藻科		
127	ひよ鳥の熟柿をつつくしづかなり		鵯
	228		
128	鵯ひたき鳥ににぎはふ粟穂庵		
	258		
129	麦ふむや鵯さわぐ山の畑		
	36		
130	徳願寺の山茶花いかに鶲殿		
	238		
131	日ごときてひたき馴染みぬ粟穂庵		鶲
	312		
	昭二〇・二・一三小宮豊隆宛		
132	ひたききて山茶花苔にちる日かな		
	139		
133	鵯ひたき鳥ににぎはふ粟穂庵		
	258		
134	山寺の石の苔はむひたき哉		
	402		
135	せきれいに生れてきしは誰やらん		鶺鴒
	46		
136	木つつきの孔みまはるや島ごもり		啄木鳥
	259		

137	朝堤ふみたつる鳴の羽音かな	動物	鳴
	338		
138	山風をつんざく鳴の羽音かな		
	20		
139	はつ雁かぬけゆく普化の鈴の音か		雁
	291		
140	貝やきの鰍煮てくむ独り酒		鰍
	206		
141	とこしへに鰡とぶ加古の入江かな		鰡
	81		
142	ひとりゐの松の実せせるいすか哉		鶸
	401		
143	兄の日はしぐれて秋刀魚くさ団子		秋刀魚
	175		
144	兄の日やさんま供へて釣談議		
	118		
145	さけ叫ぶ誰かみすてし雨の夜に		鮭
	220 藻科		
146	わが庵に老いを忘れよ秋の蟬		秋の蟬
	384		
147	蜩の声に戸をさす忘れ庵		蜩
	287		
148	亡き母が添乳する夜やきりぎりす		螽蟖
	320		
149	猫化けの行燈暗しきりぎりす		
	401		
150	秋千騎寄せくる音か轡虫		轡虫
	130		
151	南瓜くれし童女にやらん轡虫		
	294		
152	敗戦の野にうら淋し轡虫		
	101		
153	里の子はばつたににたり簑帽子		蟋蟀
	413		
154	親や子や飢うらん雨の蝗とり		蝗
	104		
155	ひとりゆく山田ざざめく蝗かな		
	234		
156	茶たて虫猫魔が棺をねらふ夜に		茶立虫
	273 藻科		
157	朝戸出の木犀靄にむせこもる		木犀
	383		
158	山寺の藤の実のとぶ炉辺かな		藤の実
	171		
159	うれ柿を烏もち去る時雨かな		柿
	227 藻科		
160	寺に病んで柿にまかせし命かな		
	205		
161	一つ家の小庭にぎはふ柿野鶏		
	330		
162	ひよ鳥の熟柿をつつくしづかなり		
	228		
163	ひよ鳴いて庵にぎはふつるし柿		
	226		
164	豆柿をひたき占めゐる峠かな		
	238		
165	山かげの柿照る村や百舌日和		
	330		

166	柿	山寺や猿が柿折る音すなり	⑨400
167	栗	木の実ほし椎にはしばみくるみ栗	⑨402⑭藁科
168	無花果	無花果を天牛の嚙む閼伽井かな	⑪120
169	胡桃	木の実ほし椎にはしばみくるみ栗	⑨402⑭藁科
170		古稀ちかく胡桃の長者となりにけり	⑪126
171		さすらひの伏屋に寒夜の胡桃をわる	⑩345
172		冬山の画仙のたびしくるみかな	⑪126
173	榠樝の実	戔然とくわりんの落つる霜夜かな	⑨184
174		くわりん落る音におどろく霜夜かな	⑪220
175	照葉	照葉老いてここにもるかや石いくつ	⑫17
176	柿紅葉	笠よ杖すはこそ嵯峨は柿もみぢ	⑬35
177	木の実	木の実ほし椎にはしばみくるみ栗	⑨402⑭藁科
178		猿こ猿こ布子とかへん木の実酒	⑨403⑭藁科
179		なにとなく木の実かなしき秋の暮	⑩383
180		古寺に木の実たのしむつんぼ哉	⑪318
181		木の実ほし椎にはしばみくるみ栗	⑨402⑭藁科
182	椎の実	子にかへり椎の実ひろはん榧の実ひろはん	⑨291
183		椎おつる人なき朝の鎮守かな	⑪20
184		鵯ぐもり鎮守の森に椎をひろふ	⑩330
185		朝しづのどん栗落る音すなり	⑨199⑭藁科
186		どん栗が背くらべしたらかはいかろ	⑨189
187		どん栗の落るばかりぞ泣くな人	⑫326
188	団栗	どん栗の猪口をかぶりて踊らばや	⑨189・291
189		どん栗のまろびおちたる覓かな	⑨401⑭藁科
190	楝の実	楝の実ぬくぬくさがる寒の凪	⑩351
191	榧の実	うまぶねに眠りし子の日榧をいる	⑪61
192		榧いりて異教の祭ほがばやな	⑪61
193		榧の実のほどよく炒れしまとゐ哉	⑯315 昭二八・一・三一稲森道三郎宛

194	榧の実	かやの実や月のよかはの狸酒	⑪166・329
195		子にかへり椎の実ひろはん榧の実ひろはん	⑨291
196		この尉に榧の実くよや自在天	⑬251
197		まどゐして雪白河の榧いるや	⑪66
198		炉さかんに雪白河の榧炒るや	⑯315 昭二八・一・三一稲森道三郎宛
199	銀杏	疎開の伏屋霜夜に銀杏をいる	⑪65
200	榛の実	木の実ほし椎にはしばみくるみ栗	⑨402⑭藁科
201	葉鶏頭	咸陽の焔さびしや葉鶏頭	⑬97
202	鬼灯	鬼灯さげて宗匠きます魂祭り	⑫279
203	菊	しぐれして納豆にぎはふ菊の宿	⑪121
204	南瓜	落人にかぼちやたまはる隣かな	⑨188
205		かんすけのかぼちやなつたぞ畑十坪	⑨373
206		子宝やかぼちや太郎瓜次郎	⑩92
207		南瓜くれし童女にやらん轡虫	⑩294
208		すほんだの庵は南瓜に望の月	⑩120
209		塵はいてかぼちやのけ得ぬ老の腕	⑮413 昭二一・一二・三〇塩田章宛
210		ぬすまれし南瓜肥ゆらんけさの雨	⑨367
211		盗まれて南瓜涼しき朝の露	⑨373
212		のふぞうな南瓜かかへて笑ふかな	⑨188・291
213		筵おる伏屋が軒の南瓜かな	⑨188
214	瓢	落ちおちて一つとまりし瓢かな	⑪120
215		この瓢に誰ぞゐぬかや秋の暮	⑪115⑭藁科
216		雀去つてひさご音するお宿かな	⑫28
217		瓢負うて河童味噌買ふ手越かな	⑯474 昭二九・一〇・一四稲森道三郎宛
218		みやこ人にちよと囀れなりひさご	⑫28
219		わが呼べばおとこたへそなふくべ哉	⑨204

冬の部

220	植物	牛蒡	山居しぐれてけづる牛蒡のかをり哉	⑨223⑭藻科
221	植物	紫蘇の実	謙信のつとは紫蘇の実からす瓜	⑬104
222	植物	稲	稲わけて月のそひくる田路かな	⑨187・290
223	植物	秋草	粉茶入れよ秋草たびし山の客	⑯148 昭二五・九・二三塩田章・玉宛
224	植物	草の実	木枯に草の実ほけてとびにけり	⑨414
225	植物	草の実	草の実を御慶のつとや山の客	⑪40
226	植物	荻	川ぐまや白帆しわむる荻の風	⑨400
227	植物	野菊	刺しとほす鎧の下の野菊かな	⑨189
228	植物	曼珠沙華	裸にて焔と化すや曼珠沙華	⑨206⑭藻科
229	植物	曼珠沙華	蛇わたる野川の岸や曼珠沙華	⑨133⑭藻科
230	植物	秋ののげし（つんぼ草）	つつゐづつあの子はいづくつんぼ草	⑩123
231	植物	秋ののげし（つんぼ草）	つんぼ草うき別れゆくや忘れ庵	⑩123
232	植物	露草	つゆ草のなかにむすばん小き庵	⑨210
233	植物	烏瓜	謙（兼）信のつとは紫蘇の実からす瓜	⑬104
234	植物	苛	狼のおくる山路や月夜苛	⑨170⑭藻科
235	植物	苛	奥山のきのこと朽ちん秋の暮	⑮313 昭二〇・二・一三小宮豊隆宛
236	植物	苛	椎茸のあと味よろし忘れ庵	⑪97
237	植物	苛	椎茸のいでてうれしき伏屋かな	⑩26
238	植物	苛	椎茸の笠きて踊れ枝蛙	⑩63・221⑭藻科
239	植物	苛	椎茸や天城の村は雲にぬれ	⑪59
1	時候	立冬	山茶花のさきつつ散りつつ冬きたる	⑪205
2	時候	小春	山茶花を孝女たびけり小春凪	⑩143
3	時候	小春	ぽかりぽかり小春木かげの檜薪わり	⑩338
4	時候	冬至	冬至来と雀に柚子をもらひけり	⑪127
5	時候	師走	甘酒や師走の寺の夜を寒み	⑯580 昭三一・一二・二五稲森道三郎宛

6	天文	師走	榧の実を炒りて師走の夜をふけぬ	⑪160
7	天文	師走	耳ながとならばや師走かやの酒	⑪166
8	天文	年の暮	年の瀬に侘助ゑみて恋しけり	⑨403⑭藻科
9	天文	大寒	大寒の越生のそばをかく夜かな	⑪170
10	天文	寒	さすらひの伏屋に寒夜の胡桃をわる	⑩345
11	天文	短日	短日の芋を洗ひて暮れにけり	⑨400
12	天文	冬の夜	冬の夜の狐は親のなくやらん	⑨224⑭藻科
13	天文	冴ゆ	鐘を献じて冴えきる除夜の声きかん	⑨190・291⑭藻科
14	天文	冬の月	したひよる猫の捨子や冬の月	⑪111
15	天文	冬凪	棟の実ぬくぬくさがる寒の凪	⑩351
16	天文	冬凪	寒凪ぎのせきれいつぐむ谷の石	⑩186
17	天文	凩	木枯に草の実ほけてとびにけり	⑨414
18	天文	凩	木枯に吹落されし杓子かな	⑩148
19	天文	凩	木枯に干さばやうき世かくれ蓑	⑨420
20	天文	凩	木枯のひと村ゆゆし大根注連	⑩344
21	天文	凩	木枯や子らゐぬ村の冬砧	⑩16
22	天文	凩	木枯や日暮れて白き干大根	⑩151
23	天文	凩	木がらしや山また山を吹き枯らす	⑨401
24	天文	寒風	うき我の胸ふきぬける寒の風	⑩162
25	天文	寒風	なぎの木に雀ちぢかむ寒の風	⑩180
26	天文	時雨	兄の日はしぐれて秋刀魚くさ団子	⑬175
27	天文	時雨	山居しぐれてけづる牛蒡のかをり哉	⑨223⑭藻科
28	天文	時雨	しぐれして納豆にぎはふ菊の宿	⑪121
29	天文	時雨	鯛殿も笠きてわせりひと時雨	⑪158
30	天文	時雨	人の世をしぐれてやれし旅の笠	⑨229⑭藻科
31	天文	冬の雨	死の影や老いをこごらす寒の雨	⑬3
32	天文	冬の雨	冬の雨ぎんなんもろて抱くこんろ	⑬226
33	天文	冬の雨	竹千竿すずめかくるる氷雨かな	⑩104
34	天文	霰	おとづれし清女が傘の霰かな	⑨401

35	霰	河童なくと人のいふ夜の霰かな	⑨400⑭藁科
36	霰	丁子かく祖母が布子や初霰	⑨402
37	霙	初みぞれ瓶の窓をふさぐ人	⑨400
38	霙	麦寒しみぞれの旅の笠二つ	⑩351
39		神と打つ剣のひびき霜冴えて	⑪38
40	霜	戔然とくわりんの落つる霜夜かな	⑨184
41	霜	くわりん落る音におどろく霜夜かな	⑪20
42	霜	けさの霜ちさき足あとなに鳥ぞ	⑩189
43	霜	疎開の伏屋霜夜に銀杏をいる	⑪65
44	霜	出城みな落ちて霜夜のかがり哉	⑩35
45	雪催	雪もよひ芋をむく庵しづかなり	⑨258
46		大雪の淡竹を伏せて納豆汁	⑬49
47		大雪や炬燵ころがき木幡の茶	⑪131
48		大雪やすぐきたまひし京の人	⑯246 昭二七・二・二三石井正之助宛
49		ひひなめす深雪の越のほしがれひ	⑪174
50		独り碁や笹に粉雪のつもる日に	⑨204⑫248⑭藁科
51		まどゐして雪白河の榧いるや	⑪66
52		みほは松風雪はたれふる甲斐の山	⑩225・28
53		雪こんこん空に吹きあげんくひな笛	⑬52
54		雪空に黒鳥ひとつ渡りけり	⑨266
55		雪竹のばさと起きたる日向かな	⑨206
56		雪の日や入間の人の青梅漬	⑯245 昭二七・二・二一塩田章宛
57		雪吹くや浅間とどろと煮ゆる夜に	⑩292
58		炉さかんに雪白河の榧炒るや	⑯315 昭二八・一・三一稲森道三郎宛
59	雪女郎	雪女郎に恋はありけり寒椿	⑩190⑭藁科
60	風花	風花の舞ひたつ峡に月たまる	⑩186

61	天文	風花や干川に泥鰌ほる人	⑨250
62	風花	月たまる峡にまひたつ風の花	⑮419 昭二二・二・七稲森道三郎宛
63	吹雪	丹頂の夢釧路に氷る吹雪かな	⑪65
64	吹雪	やよ笠を千鳥にかせや磯吹雪	⑨402⑭藁科
65	冬の雷	寒雷や紅蓮の氷わるる夜に	⑨245⑭藁科
66	冬の山	冬山の画仙のたびしくるみかな	⑪126
67	冬の山	雪山に大汗はばむしまき哉	⑨401⑭藁科
68	冬の山	雪のふじうち割らば春湧きいでん	⑨266
69	氷	鮒舟の氷わりゆく沼べかな	⑨291
70	蕎麦掻	大寒の越生のそばをかく夜かな	⑪170
71	蕎麦掻	ひしひしと餓鬼つく宵や蕎麦をかく	⑨400
72	納豆	しぐれして納豆にぎはふ菊の宿	⑪121
73	障子	霧雨の障子さされて藁科砧	⑪20
74	大根干す	木枯や日暮れて白き干大根	⑩151
75	干菜	好きし父を偲びてむせぶ干葉の飯	⑮360 昭二一・四・一六稲森道三郎宛
76	藁科仕事	一足は仏につくる藁科草履	⑪64
77	泥鰌掘る	風花や干川に泥鰌ほる人	⑨250
78	泥鰌掘る	風はなや干川に泥鰌ほる翁	⑮312 昭二〇・二・一三小宮豊隆宛
79	日向ぼこ	唐丸のどうどうと鳴く日向かな	⑨189⑭藁科
80	日向ぼこ	無為にして化すものもなし日向ぼこ	⑨320
81	日向ぼこ	山羊ひげにひたきみとれる日向ぼこ	⑯43昭二四・一・二五
82	追儺	うちあて丶鬼笑はせん老の豆	⑯170 昭二六・二・二稲森道三郎宛
83	追儺	小鬼らに蜜柑ふるまへ鬼は内	⑨264
84	追儺	豆打つて追ふ鬼もなき侘居かな	⑪25
85	追儺	わがために撒く影もある追儺かな	⑩359

| | | |

新年の部

1	時候	元日	なにもなき元日もよし日向ぼこ	⑨249
2	時候	元旦・初日の出	元旦の海かたぶけて初日の出	⑩158
3	生活	雑煮	さすらひの春をうづらの雑煮かな	⑩157
4	生活	初夢・屠蘇	初夢をほうと忘れて屠蘇二日	⑪20
5	植物	福寿草	山鳴つてなゐふる野べや福寿草	⑪27
138	植物	葱	黒土によき句かかばや葱の筆	⑩40
137	植物	水仙	斎宮のおんゑみ浄し水仙花	⑨422⑭藁科

無季

1		さすらふや恋にも古き奈良の京	⑨186⑫225⑭藁科
2		住みわびぬ暮山の雲とならばやな	⑨106・291
3		飯煮ゆる音もゆゆしき山居かな	⑨189⑭藁科
4		ふかふかと鵺の流るる闇夜かな	⑨189・290⑭藁科
5		尭の牛鼻のみなめてゐたりけり	⑨189・291⑭藁科
6		雲に入る鳥にわかれの独りかな	⑨199⑭藁科
7		戸隠や小栗鼠小走る朴並木	⑨199
8		あま水に大根の芽の沈みけり	⑨204
9		夜がらしやうぶめさまよふ山の町	⑨204⑭藁科
10		千年を泣きつづけたる埴輪かな	⑨206⑭藁科
11		こけしには親兄弟もなかりけり	⑨206⑭藁科
12		米足らず蕎麦ひく臼の重さかな	⑨212⑭藁科
13		よき人の骨をすくはん貝杓子	⑨217
14		別れゆく影ふきけすな川の風	⑨231
15		霹靂とならばアッツ落つる夜に	⑨234
16		山かげに伏せ貝ひとつ柴屋寺	⑨236・403
17		荒潮やしばし入日をふきかへす	⑨258⑭藁科
18		入道がふぐりをつかむ山湯かな	⑨273
19		わが骨に独鈷もらうて別るるや	⑨273⑭藁科
20		黒潮か血しほ岸を打つ硫黄島	⑨320
21		わらしなや夢を流して石の音	⑨327⑫237
22		笊をなかに我も豆むくまどゐ哉	⑨331
23		焼跡の兜おこせば子の髑髏	⑨350
24		大海に亀をはなちて浮寝かな	⑨370⑩28
25		ためさるるあうら冷たき踏絵かな	⑨339⑭藁科
26		おんおんと伽藍ひびかす魚の悔	⑨401
27		八十の嫗薬ほる山のくま	⑨401
28		風にちれむそぢの砂絵青や赤	⑨402
29		凶凶と闇に叫べ鷺はとり山	⑨402
30		湖に鐘つきおとす比叡の寺	⑨402⑭藁科
31		大雨や恒河にながす仏陀の夢	⑨402
32		うき雲の袖ふる夢の別れかな	⑨402⑭藁科
33		粕やいて鳥の話を書く夜かな	⑩38
34		ひく汐にころげてゆきし小貝かな	⑩48⑭藁科
35		飢餓の春に父のすきけん干葉の飯	⑩48⑭藁科
36		毒をはいて後生明るきふぐ提燈	⑩76
37		こざけ汲む杓子も友も老いせぬや	⑩81
38		うたた寝の天狗を投げてさめにけり	⑩92
39		魚追ふ足の細さよ老いの網	⑩93
40		わらしなを君こえくらん雲の影	⑩103
41		鰓つりホソに似かよふ兄の脛	⑩133
42		犬神が人くひし夜ののつと哉	⑩153
43		有明や流離の窓の夢の影	⑩161
44		亡国の畑に靖節の鍬を打つ	⑩162
45		居ぬぞよと烏屋根をはぐ山の庵	⑩264
46		忘れ庵檜風松風しだのかぜ	⑩268
47		山の庵に雑木白くさきにけり	⑩268

48	山やまに覆わきたつ峡の春	⑩360
49	殻赤き玉子をがめば入日舞ふ	⑩369⑫291
50	この花ちつて難波さびしき木の頭	⑩370
51	暮れのこるさいこなかしむ河原かな	⑩383
52	やま里の鳥みな黒くくれにけり	⑩383
53	生垣の路地に声よきめうり哉	⑪113
54	のぼる日に燃ゆる海なり立羽だち	⑪120
55	貘の屁や痴人の夢のはてどころ	⑪21⑭藁科
56	老いぬれば白く小さし夢の花	⑪223
57	松風もききえぬ老いの侘茶かな	⑪225
58	缶風呂やがうな身につく殻を得たり	⑪336
59	土風や九曜かがやく果羅の道	⑪338
60	老いの日のおかめ小豆よ山のつと	⑪559
61	百足の草履に老ゆるめしひ哉	⑪664
62	彩られて年のとられぬこけし哉	⑪1105
63	うきことは風にまかせて鳥をきくや	⑪1105
64	貝つりに水もりいでし田舟かな	⑪1111
65	土笛のかつことよばる庵かな	⑪1125
66	千万の人柱立てて国倒る	⑪1166
67	京なまりうすれて淋し嵯峨御室	⑬4
68	鞍ずれに老馬の悩むつづらをり	⑬223
69	また一つ命ひろうて初音かな	⑬70
70	風神のわすれてゆきし鬼燈かな	⑬96
71	わが恋はひとめしのぶの車海老	⑬119
72	侘びはてて天狗ちぢまる土鈴かな	⑬239
73	仏ゐぬまに鶏とそばくふ深大寺	⑪309
74	深大寺ほとけおはすぞ馬に鞍	⑪316
75	またきたと我を弾くな角大師	⑪317
76	武蔵野に白鳳の釈迦おはしけり	⑪318

77	人去つて三門さびし白河女	⑫9
78	はにかみも嵯峨の童よ竹の蔭	⑫14
79	庵ぬしは旅にでられて蓑と笠	⑫14
80	祇王寺やわく井音する庵のくち	⑫16
81	金剛杵より蜂が怖うて見ぬほとけ	⑫22
82	大別の栗鼠の詩くらき茶室かな	⑫41
83	山鳩やふる里とほき鹿苑寺	⑫41
84	朝日さし金閣の鳳たたんとす	⑫44
85	杖かりて老いの波そふ詩仙堂	⑫47
86	いとせめてひえの鳥きく曼珠院	⑫52
87	はりま野に高麗の鐘なる鶴林寺	⑫78
88	旅人に鐸ゆりならせ灘の風	⑫78
89	段十段むく犬守護す禅居庵	⑫190
90	朽ちはてて鳩の豆まく杓子かな	⑫192
91	御社やあの子はいんで鳩曇り	⑫192
92	彌陀仏やかのいろくづも慈悲の網	⑫193
93	古奈の宿温泉やはく恋ににて	⑫258
94	笙の音ににたる旅愁や伊豆の宿	⑫259
95	千段の琴ひく山の禅寺かな	⑫261
96	病魔され清正ここに御在宿	⑫282
97	亡き鳥の落羽かぞへる涙かな	⑫323
98	サイパン島人死にはてて静なり	⑮309昭一九・九・二小宮豊隆宛
99	あの入日うちわらば何が生るらん	⑮309昭一九・九・二小宮豊隆宛
100	天狗風こんにやく折りてゆきにけり	⑮312昭二〇・二・一三小宮豊隆宛
101	河童煮るふごを唐箕がくふ夜哉	⑮336昭二〇・一二・一三小宮豊隆宛
102	戸隠や一里香をふく朴並木	⑮375昭二一・六・九小宮豊隆宛
103	わが声を風ときくらん死出の山	⑮384昭二一・七・二九小宮豊隆宛
104	干河童が盥にうける俄雨	⑮415昭二二・一・五稲森道三郎宛
105	願成つて目を白黒の達磨かな	⑮417昭二二・一・一六稲森道三郎宛

106	菰かぶり一本の値打如何	⑮447昭二二・九・一六稲森道三郎宛
107	この友と汲めばや母のちちぶ酒	⑮58昭二四・四・一四稲森道三郎宛 塩田家宿帳昭二四・三・三〇
108	雪きえて庵は駿河の玉ぬるむ	⑯173昭二六・三・二稲森道三郎宛
109	紅雀も睦むすゞめのお宿かな	⑯191昭二六・五・二二稲森道三郎宛
110	苔寺の苔に落る葉しづかなり	⑯339昭二八・五・一三小宮豊隆宛
111	亡き人の伊賀の茶碗の薄茶かな	⑯422昭二九・一・一九塩田章宛
112	古稀の宴友あり酒あり若返る	⑯451昭二九・五・二七稲森道三郎宛
113	お日待ちは豆腐でのむと河童かく	⑯474昭二九・一〇・一四稲森道三郎宛
114	満ち足れる旅やるせなき愁ひかな	⑰59昭三一・一〇・一四庄司辰雄宛
115	杉の森禅の音こもる龍沢寺	⑰59昭三一・一〇・一四庄司辰雄宛
116	雀鳥われもうれしき垂穂かな	⑨212
117	国破れて山の香はあり苔の汁	⑩296
118	ひと声は小石もなけやるりの墳	⑫257